

門坂シズマ遺跡

1991

建 設 省

財団法人 岐阜県文化財保護センター

序

御嶽山の西麓に広がる小坂町は、豊かな自然に恵まれ、人情味に溢れた心温まる町です。

この地には縄文時代の遠い昔から脈々と人間の営みが続いてきました。小坂町内では多くの縄文遺跡の存在が知られてきましたが、これはただ単に縄文人の生活に適していた土地というだけでなく、この地を愛する人々が文化遺産を守ろうと地道に調査を重ねて来たことに由来するものです。

さて、このたび、国道41号線門坂地区局部改良工事に伴い、門坂シズマ遺跡の発掘調査を実施しました。発掘調査は、建設省から委託された岐阜県教育委員会から再委託を受けた財団法人岐阜県文化財保護センターが担当しました。当センターは、先人が残した貴重な文化遺産を調査・保存し、その保護思想の普及の拠点として、平成3年4月1日に設立されたばかりです。設立されてまだ日も浅いセンターですが、多くの方のご理解・ご協力のおかげをもちまして、調査報告書を刊行する運びとなりました。

発掘調査の結果、今回の調査地点は、遺跡の中心をはずれていきましたが、縄文時代中期前葉から中葉にかけての集落遺跡の一端が明らかになりました。また、出土遺物を見ますと、西日本系と北陸系の土器が多く見つかった点などから各地域との文化交流があったことがわかりました。日本の中央に位置する岐阜県は、古来より東西文化の影響を受けて独自の文化を形成してきました。本遺跡の発掘調査も、やはり縄文時代の文化交流の様子を知る上で貴重な資料を提供することができたと思います。

最後になりましたが、発掘調査にご協力頂きました関係各機関および、地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 岩崎忠夫

例　　言

1. 本書は、一般国道41号門坂地区局部改良事業に伴う門坂シズマ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、建設省と岐阜県が委託契約を結び、財團法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 門坂シズマ遺跡は、岐阜県益田郡小坂町門坂に所在する。本遺跡の発掘調査は、平成3年4月1日から平成4年3月31日まで実施した。
4. 調査にあたっての組織は次の通りである。

理事長　　秋本 敏文（平成3年4月1日～平成3年10月15日）
岩崎 忠夫（平成3年10月16日～平成4年3月31日）
副理事長　　榎田 幸雄
調査指導　　岐阜県教育委員会
指導調査員　八賀 晋（三重大学教授）
調査課長　　西村 覚良
調査係長　　只腰 正知
調査担当者　上嶋 善治
事務局長　　岩砂 仁
事務局　　小林 哲夫

5. 遺物の整理・報告書作成にあたっては、上記の調査担当者のはか下記のセンター職員の協力を得た。

宇野 治幸　武藤 貞昭　川部 誠　各務 光洋　佐野 康雄　鈴木 昇

6. 報告書の執筆は上嶋善治が担当した。

7. 本発掘調査にあたって、建設省中部地方建設局高山国道工事事務所・小坂町・益田県事務所・飛驒教育事務所には、多大な協力を得た。また、下記の地元の研究者、県内外の研究者諸氏には、調査及び報告書執筆にあたって、ご指導・ご教示を得た。記して感謝の意を表する次第である。

石原 哲弥（高山考古学研究会）　大江 午（岐阜県考古学会）
吉朝 則富（高山考古学研究会）　今津 利治（岐阜県立博物館）
内堀 信雄（岐阜市教育委員会）　小島 俊彰（金沢美術工芸大学）
島田 修一（富山県埋蔵文化財センター）
工藤 俊樹（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）（氏名順不同）

8. 発掘調査作業及び整理作業には、下記の方々の参加・協力を得た。（順不同）

鈴木 譲・松森酒造・松森美千代・吉川理一・吉川まさえ・吉川礼子・大森守之助
大森茂男・小林一茂・大森隆司・大森喜之・今井詔二・石原末太郎・川端久男
小杉幸一・木一七老・今井平治・坂本利正・蒲 静枝・澤山幸四郎・鈴木敏子

目 次

序

例 言

第1章 遺跡の立地と歴史的環境.....	1
第1節 遺跡の立地.....	1
第2節 歴史的環境.....	1
第2章 発掘調査の経過.....	4
第1節 調査の方法.....	4
第2節 発掘調査の経過.....	4
第3章 遺構.....	6
第1節 基本的層序.....	6
第2節 ピット群.....	9
第4章 遺物.....	12
第1節 縄文土器.....	12
第2節 石器.....	26
第3節 中近世の遺物.....	31
第5章 まとめ.....	33
石器一覧表.....	34
図版.....	39

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 周辺および小坂町内の主要縄文遺跡	3
第3図 グリッド設定図	5
第4図 基本的層序	6
第5図 北区・中央区土層模式図	7
第6図 南区土層図	8
第7図 ビット群（中央区南部）	10
第8図 ビット群（南区南部）	11
第9図 ビット出土の縄文土器	13
第10図 縄文土器 1群 2群1類	15
第11図 縄文土器 2群2類・3類	17
第12図 縄文土器 3群1類・2類	19
第13図 縄文土器 3群3類 4群1類 ・2類	21
第14図 縄文土器 4群2類・3類・4類	22
第15図 縄文土器 5群1類・2類	24
第16図 縄文土器 5群3類 6群	25
第17図 縄文土器 参考土器	25
第18図 石器 石鎌、ビエス・エスキュー、 石匙、スクレイバー、石核	27
第19図 石器 打製石斧	28
第20図 石器 石錘、磨製石斧	29
第21図 石器 磨石・凹石類、石皿	30
第22図 中近世の遺物	32
第23図 遺構図	51

付表目次

石器一覧表	35
-------	----

図版目次

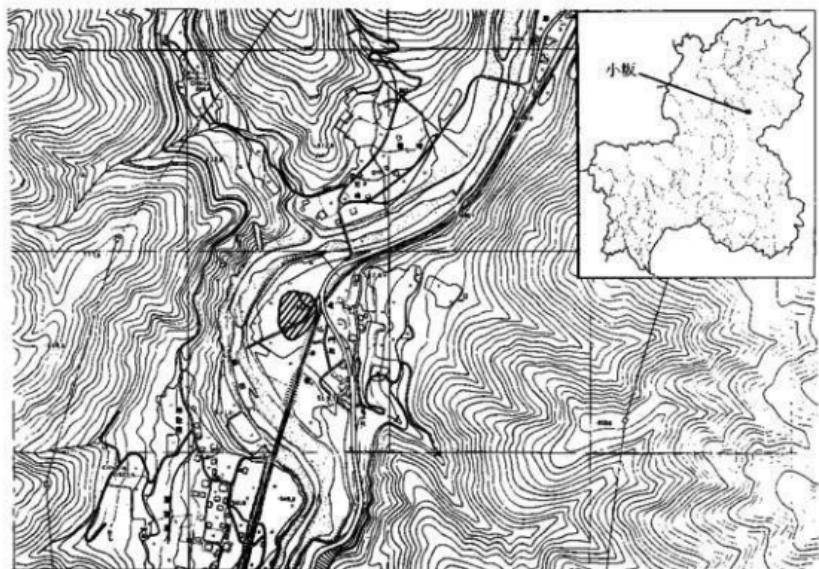
図版1 1. 発掘前全景	
2. 遺跡全景（北区）	39
図版2 1. 遺跡全景（中央区・南区）	
2. 作業風景	40
図版3 1. 中央区南部全景	
2. ビット群（中央区南部）	41
図版4 1. 南区南部全景	
2. ビット群（南区南部）	42
図版5 1. 縄文土器（ビット出土の縄文土器）	
2. 縄文土器（1群 2群1類）	43
図版6 1. 縄文土器（2群2類・3類）	
2. 縄文土器（3群1類・2類・3類）	44
図版7 1. 縄文土器（4群1類・2類）	
2. 縄文土器（4群3類・4類）	45
図版8 1. 縄文土器（5群1類・2類）	
2. 縄文土器（5群3類 6群）	46
図版9 1・2. 縄文土器（5群2類）	
3. 縄文土器（4群2類）	
4. 縄文土器（参考土器）	47
図版10 1. 石器（石鎌、石匙、スクレイバー）	
2. 刺片など	48
図版11 1. 石器（打製石斧）	
2. 石器（石錘、磨製石斧）	49
図版12 1. 石器（磨石・凹石類、石皿）	
2. 中近世の遺物	50

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

益田郡小坂町は御嶽山の西のふもとに位置し、周囲を山々に囲まれ、豊かな山林資源に恵まれた地である。北西部に益田川が流れ、東部には小坂川が西流している。この二つの川の合流点のあたりが町の中心地である。

門坂地区は、益田川の流域で、町の中心部の北部に位置し、大野郡久々野町に接している。門坂シズマ遺跡は、益田川の左岸の段丘に位置している。遺跡の中央部をJR高山本線が断ち切っている。



第1図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

小坂町内では、縄文時代以前の遺跡は明らかになっていないが、有舌尖頭器が2点見つかっている。¹⁾第2図は本遺跡と周辺の遺跡および小坂町内の主要な遺跡の位置を示している。小坂川の流域は河岸段丘が発達しており、有力な縄文遺跡がいくつかあり、詳細な内容も明らかに

されつつある。それに対して、本遺跡は、石鎌・打製石斧・石錐が出土しており、縄文時代の遺跡と考えられていたが、土器類の出土はほとんどなく、遺跡の性格や時期などの推定は困難であった。²⁾また、付近の遺跡（川原なぎ遺跡・岩崎神社遺跡・杉山遺跡）もほぼ同様の状態である。³⁾

以下、周辺の遺跡および小坂町内の主要な遺跡について概要を略述する。⁴⁾

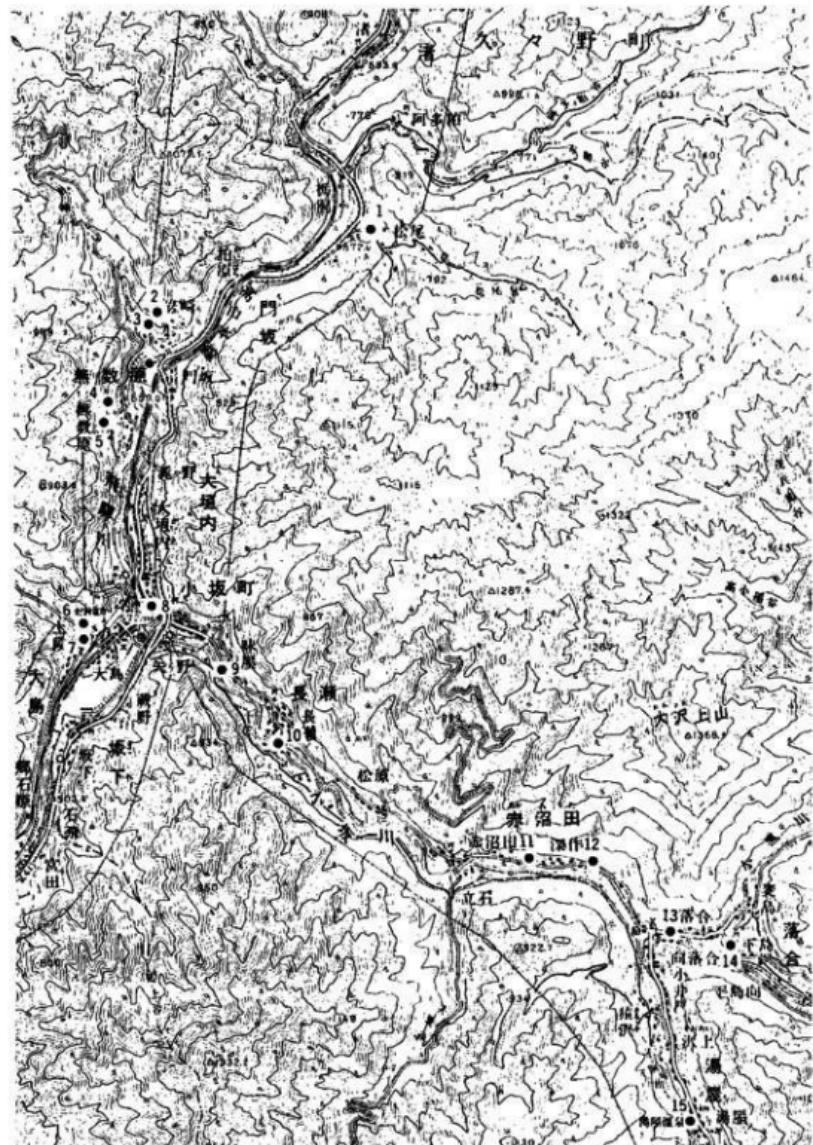
- 1 松尾洞遺跡 打製石斧・磨製石斧が採集されている。
- 2 川原なぎ遺跡 石鎌・石錐が採集されている。
- 3 岩崎神社遺跡 石鎌・石匙・石錐が採集されている。
- 4 杉山遺跡 石鎌が採集されている。
- 5 森ヶ平遺跡 石鎌・打製石斧とともに縄文土器および弥生土器が見つかっている。
- 6 岩井田遺跡 前期を中心に早期から後期の土器が出土している。
- 7 橋場遺跡 押型文土器を主とする遺跡である。
- 8 水口遺跡 益田川との合流点に近い小坂川の右岸に位置し早期から後期の土器が採集されている。方形の石囲い炉と埋甕が発掘されている。中期後半加曾利E式期のものと考えられている。
- 9 味屋大林遺跡 前期から中期初頭の土器片が採集されている。土器型式では、木島式、石塚上層式、北白川下層II式、諸磯a式、諸磯b式、大歳山式、鷹島式等である。
- 10 長瀬上野遺跡 凸帯を有する押型文土器が出土している。
- 11 深作河弥陀堂遺跡 小坂川右岸の沖積低地に立地する晩期の遺跡である。
- 12 深作裏垣内遺跡 早期・前期・中期・晩期の土器片が見つかっている。器形が復元できたものがあり、五領ケ台式に並行すると思われるものである。
- 13 福応寺遺跡 楠円文・山型文の押型文土器と無文土器片とともに、石鎌・石匙・削器・局部磨製石鎌・搔器が見つかっている。
- 14 南垣内遺跡 小黒川と濁河川との合流点に囲まれた所で、規模の大きい遺跡である。昭和26年に「ストーンサークル」と呼ばれている遺構が見つかった。早期から晩期の土器が出土しているが、昭和56年度に実施された発掘調査では中期前半の遺物が多く出土した。⁵⁾
- 15 湯屋遺跡 小坂川の支流大洞川の河岸段丘に立地し昭和30年には道路工事によって堅穴住居跡が確認され、加曾利E式の埋甕が出土した。

(註) 1) 高山市教育委員会『飛騨の考古学遺物集成』(1986)

2)・3) 『小坂町誌』、『岐阜県史』通史編原始(1972)による。

4) 大江 伸『飛騨の考古学I』(1965)、『岐阜県史』通史編原始(1972)を参照した。なお、遺跡名は『岐阜県遺跡地図』(1990)による。

5) 小坂町教育委員会『南垣内遺跡』(1984)



第2図 周辺および小坂町内の主要縄文遺跡

第2章 発掘調査の経過

第1節 調査の方法

地区の設定は4m×4mのグリッドで、東から西にA列・B列・C列…、北から南に1列・2列・3列…とした。さらに、発掘調査区域内の地形や農道の位置などから、北区・中央区・南区の3区画に分けることにした。

発掘調査の進め方としては、遺跡の範囲をおよび遺構の確認をするために、原則として千鳥掘りとし、状況に応じて平面掘りとすることにした。

第2節 発掘調査の経過

平成3年4月1日に財団法人岐阜県文化財保護センターが設立され、発掘調査の準備にかかった。8月2日の調査始め式をもって、本格的な調査を開始した。現地での調査の経過は次の通りである。

第1週(7.24～7.26) 現場事務所の設置および器材の搬入を行うとともに、現場の草刈り作業を進めた。

第2週(7.29～8.2) 表土(耕作土)の掘削を重機を利用して行い、基準の杭打ち作業を行った。8月2日に調査始め式を行った。

第3週(8.5～8.9) 北区の掘削を開始。遺物包含層は比較的薄く、縄文土器片・打製石斧などが少量出土した。大変暑い時期の発掘なので、ビニールシートなどによる日除けを工夫して作業にあたった。

第4週(8.12～8.16) 盆休み

第5週(8.19～8.23) 北区の南部を掘削したが、山石が散在し遺物もほとんどない。中央区の掘削にかかった。

第6週(8.26～8.30) 中央区南部の掘削。黒色土の堆積が比較的厚く、縄文土器片の出土も北方より多い。遺構の検出面まで掘り下げた。

第7週(9.2～9.6) 中央区南部を平面掘りし、南区北部の掘削にかかった。出土遺物は少なく、陶磁器片が少量見つかった。C35グリッドでピットが検出されたが、遺構が広がっている様子は観察されなかつた。

第8週(9.9～9.13) 南区南部の掘削開始。黒色土の堆積が厚くなっている。

第9週(9.17~9.20) 南区南部は、土器・石器の出土が他地区に比べて多い。集石が観察された。性格は不明。

第10週(9.24~9.27) 南区南部の平面掘りを始める。

第11・12・13週(9.30~10.18) 南区南部の掘削。土層観察用のあぜを記録しながら撤去。

天候不順の日が多く、思うように作業が進まず。

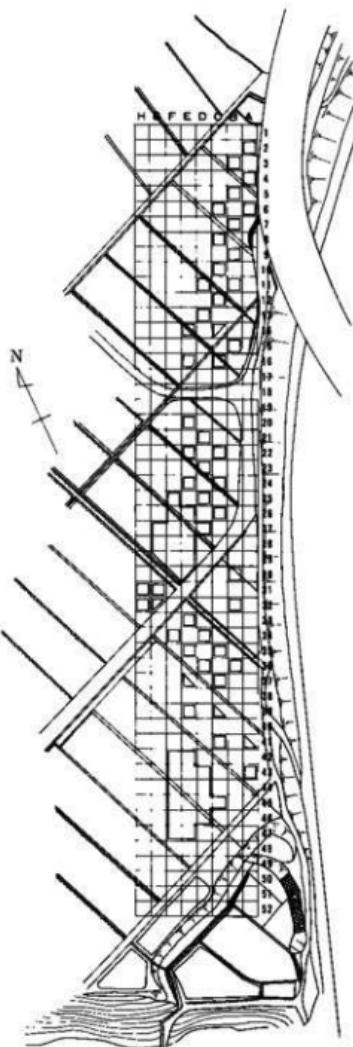
第14週(10.21~10.24) 中央区南部の遺構の検出および掘削。ピット群を確認。

第15週(10.28~11.1) 南区南部の遺構の検出および掘削。ピット群を確認。

第16週(11.5~11.8) 中央区南部のピット群の実測。南区南部の調査地点を拡張。森本理津夫氏から畑で見つかった土器を寄贈される。

第17・18週(11.11~11.25) 南区南部のピット群の実測。11月15日に空中写真撮影。セクションの実測。11月25日に調査納め式を行った。

11月26日以降は、出土遺物等の整理と報告書の執筆にとりかかった。



第3図 グリッド設定図

第3章 遺構

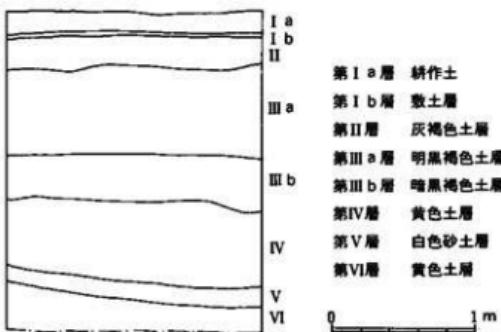
第1節 基本的層序

本遺跡は、益田川左岸の河岸段丘上に立地する。東側の山からは三つの谷が下りてきて、やがてゆるやかな斜面を経て、平坦地になった地点である。西側は断崖となっており、南側は下位段丘を形成している。南流する益田川はここで大きく西にカーブを描いており、東から西への土砂の流れ込みを予想させるが、発掘調査の結果もそれを裏付けた。

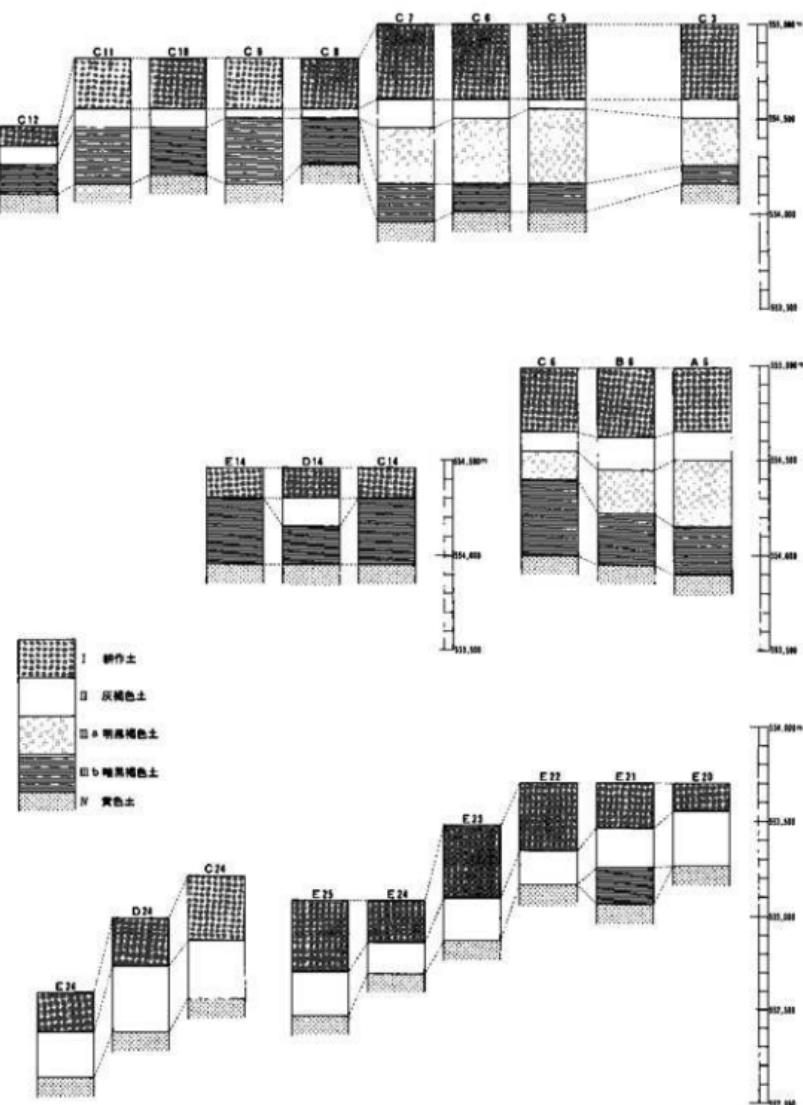
段丘面は、水田および畠が広がっており、発掘調査地点は周辺と同様に石垣で段を作りながら水田があった所である。

基本的層序は、第Ⅰ層は耕作土。粘質的な褐色土であるⅠa層と、敷土層で鉄分やマンガン分が沈殿・堆積して赤茶けているⅠb層からなる。第Ⅱ層は灰褐色土で中近世の遺物が出土している。第Ⅲ層は黒褐色土で、縄文中期の遺物が出土する。境界が不明瞭であるが、明黒褐色土(Ⅲa層)と暗黒褐色土(Ⅲb層)に分層できる。第Ⅳ層以下黄色土の堆積がつづくが川の流れによる白色砂土の堆積も見られる。

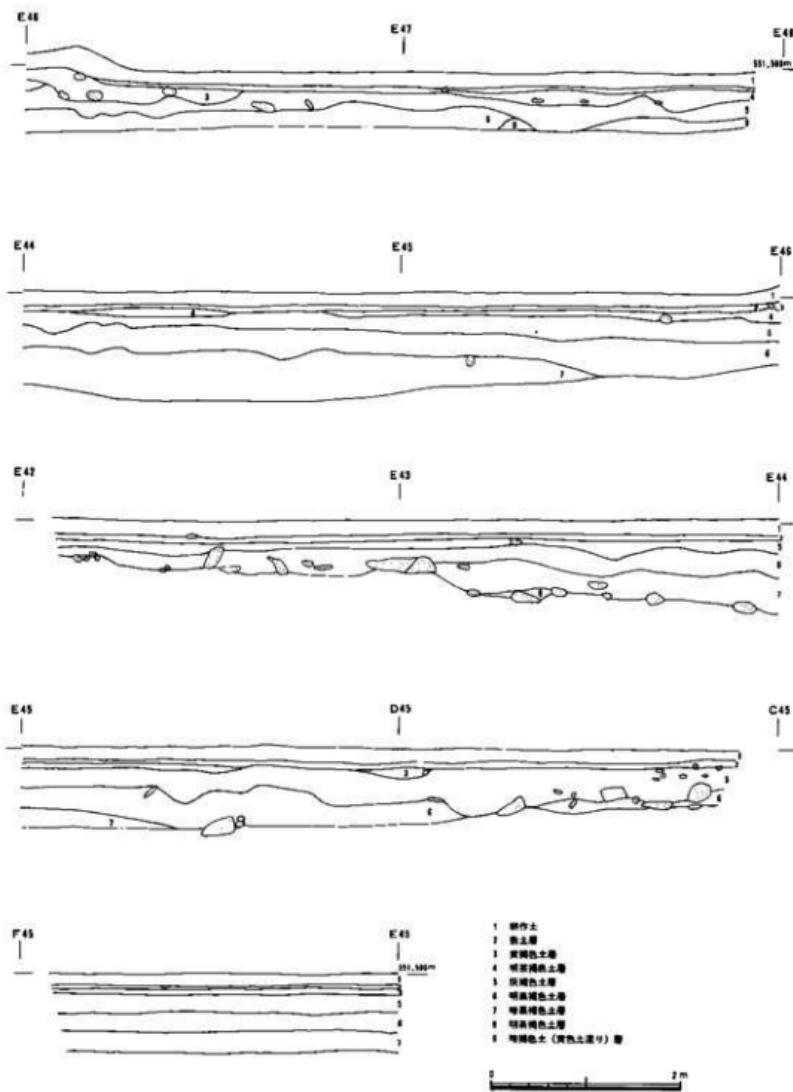
地形は、基本的には北から南に向かって傾斜しているが、多少の起伏があったようである。遺物包含層である黒褐色土の堆積は、北区の北部、中央区の南部、南区の南部が厚い。また、北区の南部から中央区の北部にかけて疊の流れ込みが観察された。



第4図 基本的層序



第5図 北区・中央区土層模式図



第6図 南区土層図

第2節 ピット群

地区ごとに遺構の状況を概観すると、まず、北区の北部は出土遺物も少なくて、明確な遺構は検出できなかった。北区の南部から中央区の北部にかけては、表土から地山までが浅く、巨石を含む石が多く広がっている。中央区の南部は石が少なく黒褐色土が安定して堆積しており、縄文中期前葉の土器が出土しており、後述するように、竪穴住居跡を想定させるピット群が見つかった。

南区の北部は出土遺物が少なく明確な遺構はほとんどなかった。南区の南部では、斜面に沿って集石が見られたが、自然のものと考えられる。この区域では、後世に石を埋めたと思われる土壤などとともに、やはり、竪穴住居跡を想定させるピット群が見つかった。

中央区南部

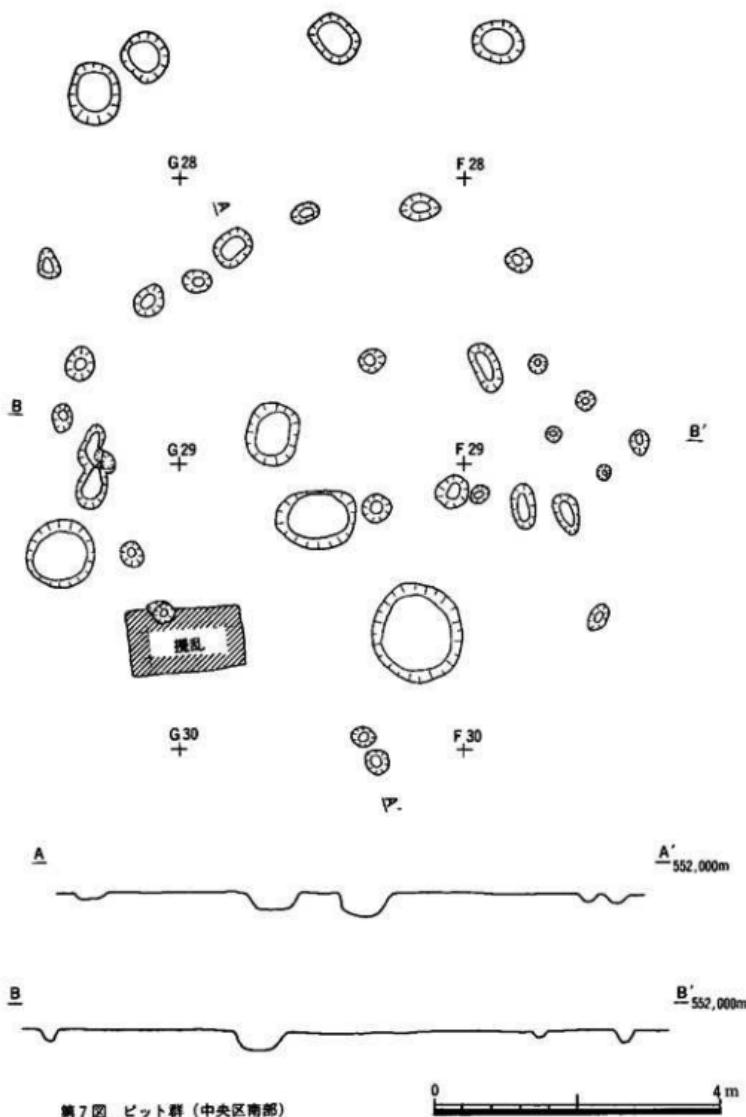
直径約20cmから約120 cmのピットが検出された。黒色土の堆積により、竪穴住居跡のプランは確認できなかったが、ピットは直径約6 mの不整円形に位置しており、竪穴住居跡の柱穴と思われる。ピット38およびピット40からは土器が見つかったが、時期は不明である。しかし、包含層からの出土土器からみて縄文中期前葉のものと推定される。

南区北部

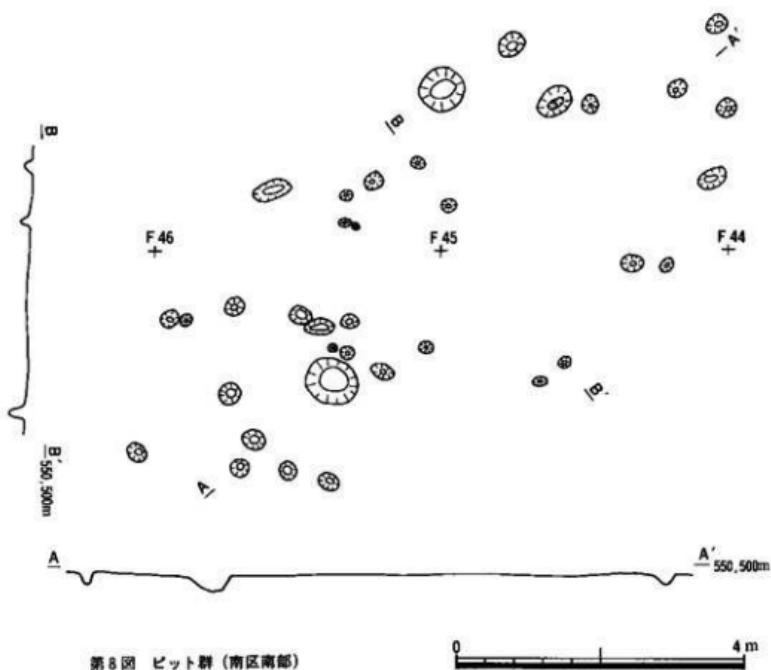
C35グリッドおよびC37グリッドで後世からの掘り込みを含むピットが検出された。ピット45からは縄文中期初頭と思われる土器が見つかった。周囲は黒褐色土の堆積も薄く、遺物も少なくて、他の遺構の検出はできなかった。

南区南部

黒褐色土の堆積が厚く、出土遺物も多かった。直径約1 mのピットもあるが、直径約20cmのピットがいくつかあり、長径約6 m、短径約4 mの橢円形に位置するピット群は、竪穴住居跡の柱穴と想定される。やはりプランは検出できなかった。ピット76出土の土器および包含層からの出土土器からは、やはり、縄文中期前葉の時期が当てられる。



第7図 ピット群（中央区南部）



第4章 遺 物

第1節 縄文土器

口縁部から底部まであって図上で器形が復元できるものが1点あったが(第15図)、完形品ではなく破片ばかりである。早期のものと思われるものもあるが、中期前葉のものが中心である。また、森本理津夫氏によって、発掘調査地点の西方の畠地で採集された土器(第17図)についても紹介する。

縄文土器の出土層位はほとんどⅢ層(黒褐色土層)で、一部、Ⅱ層(灰褐色土層)に混入している。出土地点は石器類も同様であるが、中央区南部と南区南部の平面掘りした地点に集中している。

ピット38出土の縄文土器(第9図1、図版5)

縄文を全面に施しており、器厚は11~12mmである。

ピット40出土の縄文土器(第9図2~4、図版5)

2は縄文を施し条痕調整がなされている。3・4は無文で、3には指押さえの跡が観察できる。

ピット45出土の縄文土器(第9図5~9、図版5)

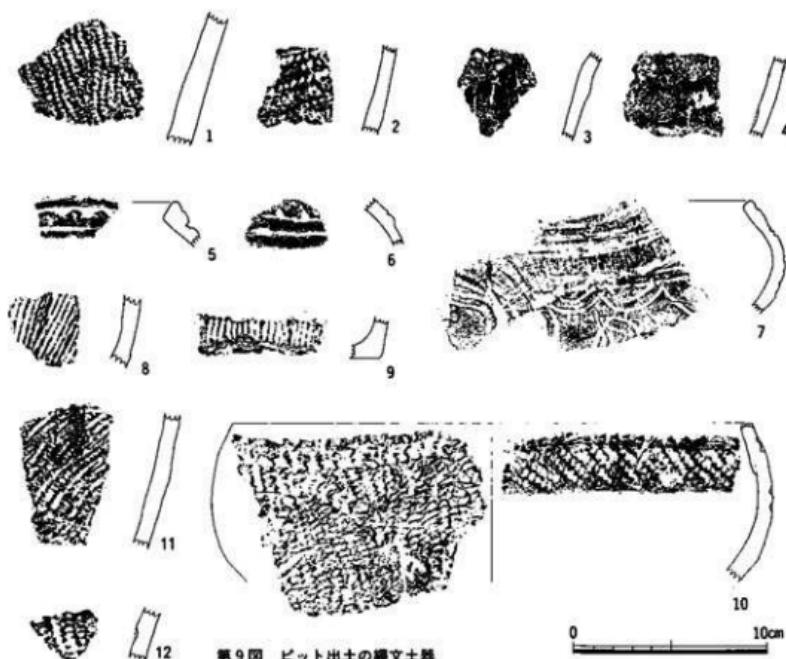
5・6は同一個体と思われる。内傾する口縁で、横位に沈線を巡らすとともに連続する三角形印刻文を施す。焼成・胎土ともに悪く、砂粒が多い。関東の中期初頭五領ヶ台式との関連が考えられる。7は内湾する口縁でゆるやかな波状を呈するようである。直線・曲線・波状の沈線で区画され、その中をさらに沈線で充填している。8・9は木目状燃糸文と思われる。9は底部である。

ピット76出土の縄文土器(第9図10・11、図版5)

10は内湾する口縁で、縄文を地文とし、二連一組の爪形状の刺突列が口縁に沿って横位に巡らされ、さらに円弧状にも同様の文様が展開する。口縁端部にも刺突が連続し、口縁部内面は幅2.5cmの肥厚帯があり縄文が施されている。後述する2群3類の土器である。11は全面に縄文が施され、指押さえの跡がある。

ピット105出土の縄文土器（第9図12、図版5）

縄文のみで、器厚は9mm、胎土は砂粒を多く含む。



第9図 ピット出土の縄文土器

遺構外出土の縄文土器

上記のように、遺構（ピット）から出土した遺物は少なく、時期を推定できるものもごくわずかである。縄文土器のはほとんどは包含層からの出土であるが、遺構の検出が困難であったため、何らかの遺構に伴うものであった可能性もある。以下、主として施文方法により、次の6群に大別して記述する。

1群 繊維を含み、条痕調整し貝殻の腹縁による連続刺突文を施すもの。

2群 連続爪形文を施すもの。

3群 半隆起線文を施すもの。

4群 上記以外の文様を施すもの。

5群 繩文および無文のもの。

6群 底部および脚台部。

1群 (第10図1、図版5)

第10図1の1点のみ。纏維を含み、器面の内外面を条痕調整し、横位に貝殻腹縁による連続刺突文が施されている。波状口縁を呈し、口縁端部に内外から連続刺突がなされている。上下交互の押圧による刻目状凸帯が山形にめぐっている。器厚は9mm。上ノ山式に類するものと思われる。

2群 (第10図2~18・第11図19~45、図版5・6)

連続爪形文を施すものであるが、次の3類に分類する。中期初頭の鳶島式を含む、いわゆる西日本系の土器である。次の3類に分類するがさらに細分することも可能である。

1類 粗い撚りの特徴的な繩文を地文として、低い貼り付け隆帯の上に爪形文を施す。

2類 一連ないし二連の連続爪形文を施す。

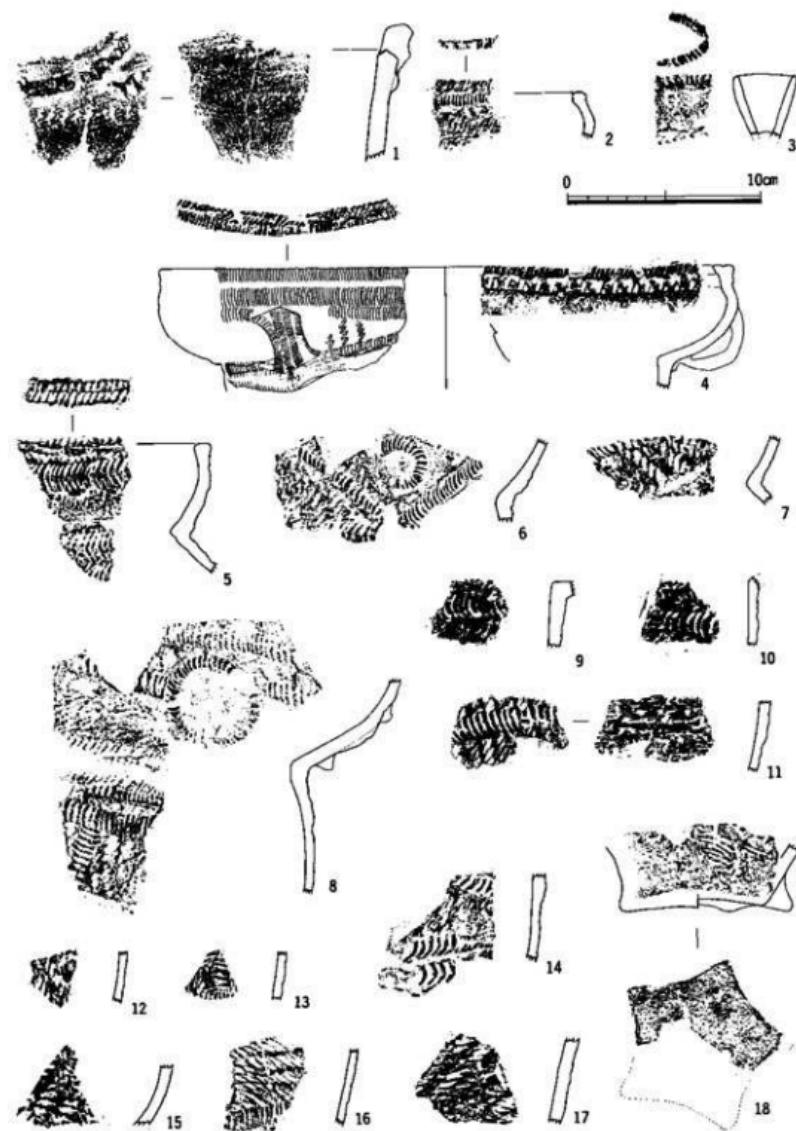
3類 連続する刺突文を施す。

1類 (第10図2~18、図版5)

粗い撚りの特徴的な繩文を地文として、低い貼り付け隆帯の上に爪形文を施す。口縁部は屈曲し、キャリバー形を呈し、口縁部にも凸帯を設け連続の刻み目を入れ、口縁部内面に繩文帯を施し、その下にかすかな稜がある。平口縁のものと波状口縁のものがあり、さらにいわゆる酒杯状突起も付くようである。底部として特徴的な五角形底がある。

2は口縁部内面に幅5mmの繩文帯がつき稜線がある。炭化物が付着している。3はキャリバー形の平口縁で、口縁端部に内外から連続爪形文が施され、口縁内面に1粒が6~7mm程の繩文が3粒ずつセットで8mm間隔に並び、器面調整により低い稜線が形成されている。内面に炭化物の付着している。橋状把手があり、把手の両側辺には連続爪形文をほどこした凸帯が、中央部には爪形文を施した低い貼り付け隆帯が付いている。4はいわゆる酒杯状突起の一部と考えられる。口縁端部に連続の刺突が見られる。5はくの字状に屈曲した口縁部で、口縁内面に稜線が形成されていない。6~10は屈曲する部分で、6・8には爪形文を施した円形の貼り付け凸帯がある。11は内面に胎土中の砂粒が器面調整時に動いた条痕が多く見られる。15は湾曲する頸部の破片と思われる。17は爪形文がないが、地文の繩文から見て同様の土器と思われる。18は五角形底である。

2類 (第11図19~37、図版6)



第10図 繩文土器 1群、2群1類

一連ないし二連の連続爪形文を施したものである。

19は口縁端部に爪形文が施されており、部分的に内外二条になっている。口縁内面に繩文帯があり、表側の連続爪形文はカーブの大きいC字形のもので、横位に展開している。20は口縁端部の文様は顯著ではなく、かすかに刻み目が観察できる程度である。口縁内面には繩文帯がある。21は屈曲した口縁部で、直線状の連続爪形文が横位にあり、口縁端部に刻み目状の爪形が施されている。口縁内面に繩文帯がある。22はくの字状に屈曲した口縁部で口縁端部に内外から刻み目状の爪形が施され、口縁内面には繩状のものを押しつけた跡がある。表側の連続爪形文は押し引き状で、文様は顯著ではない。23は逆C字形の爪形文で、口縁端部との間に沈線が巡っている。24は口縁端部に爪形文が施されている。口縁内側に折り返し状の肥厚帯がある。25~27は胎土・施文などから見て同一個体と推定される。内湾する口縁部で、口縁端部に一条の爪形文を施し、口縁内面に幅5mmの繩文帯がある。屈曲部に凸帯があり、細くカーブの緩い爪形文が密に施され、その上方に太くカーブの大きい二連の爪形文が施されている。29~31は細くて幅の広い密な連続爪形文を施している。37は2群の中では器厚が10mmと厚くやや様相を異なる。縦位の繩文を地文とし、横位の爪形文帯を有する。

3類（第12図38~45、図版6）

地文は繩文で、連続する刺突文を施している。口縁部内面にも繩文帯がある。

38~44は二連一組の爪形状刺突列が施されている。40は口縁端部にも内外から同様の二連一組の爪形状の刺突列を施している。45は丸い刺突が5~6mmおきに直線的に並んでいる。

3群（第12図46~59・第13図60~69、図版6）

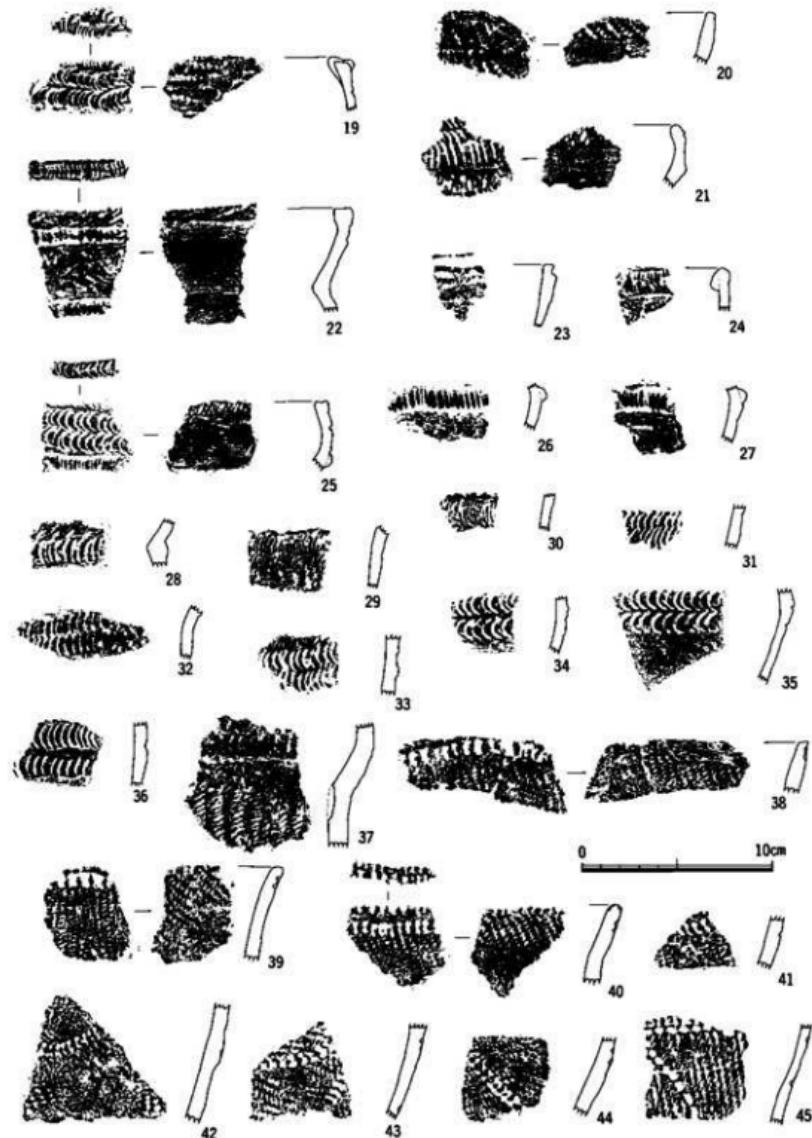
半隆起線文を施すものであるが、北陸の中期前葉、新保式・新崎式に類すると思われるものを中心とする。土器型式を考慮しながら3類に分類する。新保式の新しい所から新崎式の古い所に相当するようである。¹⁾

- 1類 新保式に比定しうるもの。
- 2類 新崎式に比定しうるもの。
- 3類 型式不明のもの。

1類（第12図46~50、図版6）

新保式に比定しうるものである。²⁾

46は口縁近くの横位の半隆起線文の上下に、密な縦短線を引き重ね、3・4条単位でU字形にまとめてある。隆帶の下に曲線の区画があり、その中を縦線が埋めている。47は口縁端部に外面から連続爪形文を施し、口辺部に格子目文が展開する。48は隆線による環状の突起が付き、



第111図 織文土器 2群 2類・3類

竹管を押し引きした半隆起線が斜行する。49は突起部より隆線が垂下し、46と同様の縦短線の区画が口縁部の下を巡っている。50はキャリバー形の器形で、直線および曲線の半隆起線文が施されている。

2類（第12図51～59、図版6）

新崎式に比定しうるものである。³⁷

口縁部はやや外反し、多条半隆起線文と横位無文帯がめぐる。口辺部に刺突が連続し、上下の多条半隆起線のうち各1本に爪形が施されている。下の多条半隆起線文は湾曲した隆線によって区切られ、その部分から半隆起線が垂下している。胴部下半は繩文が施されている。57・58は半隆起線文によって区画された部分が確認できるので、胎土・焼成・出土地点などにより、51などと同一個体と思われる。56は直線と曲線の半隆起線文とともに、口辺部に連続する刻み目が施され、口縁端部に沈線が巡っている。59は繩文を地文とし、爪形を施した隆線によって区画されている。浅鉢と推定される。

3類（第13図60～69、図版6）

半隆起線文を施したもので型式は不明であるが、北陸系のものと思われるものである。

60は繩文を地文とし直線・曲線およびジグザグ文の半隆起線文が施されている。61～65も直線およびジグザグ文の半隆起線文が施されている。69は直線および曲線の半隆起線文で区画された部分を格子目文を充填している。

4群（第13図70～92・第14図93～126、図版7）

1～3群以外の文様を施すものである。中期前葉から中葉にかけてのものが多いようである。次の4類に分類して記述する。

1類 関東系の土器の要素を含むもの。

2類 半截竹管によって施文されているもの。

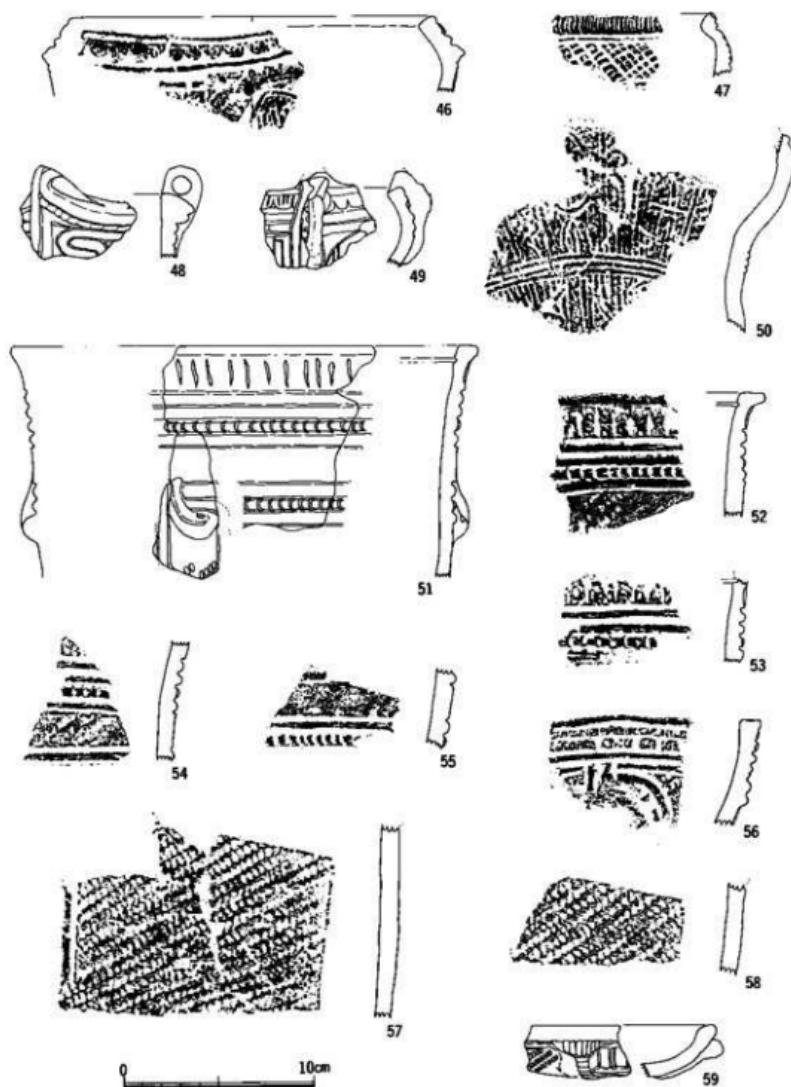
3類 隆線文を特徴とするもの。

4類 その他の文様のもの。

1類（第13図70～78、図版7）

半截竹管による施文や、三角形印刻文などを特徴とし、五領ヶ台式に類するものなど関東の土器の要素を含むと思われるものである。

70は山形の口縁で端部に爪形文の刻み目が連続する。山形の部分に三角形の切り取りがあり、波状の沈線と縦線による文様が展開する。71は貼り付け凸帯によって口縁部に突起があり、口



第12図 縄文土器 3群1類・2類

縁は波状を呈するようである。72は口辺部に三角形印刻文を巡らしている。74は70と同一個体と思われる。半隆起線が横位に展開する。75は環状の突起部で、外面は縄文で、内面は地文を縄文とし三角形印刻文が巡っている。76は山形の突起部で、2カ所切り込みがあり、側縁にわずかに三角形の印刻がある。77は横位の沈線と連続する刻み目が巡り、上下からの三角形の印刻が連続している。78は三角形印刻文が見られ、橋状把手が下方につく部分のようである。

2類（第13図79～92・第14図93～98、図版7）

半載竹管によって半隆起線などを施文したものである。

79は橋状把手で、側縁部には連続爪形文を施した凸帯がつき、半隆起線が継走する。80は円弧状の半隆起線で区画された上下に横位および縱位の半隆起線が展開する。82は横位の隆線と竹管による押し引きが見られる。84は縄文を地文とし、口縁端部は平坦である。85～87は縄文を地文とし、口縁下に二条の半隆起線が巡っている。85・86は口縁部が肥厚している。88は隆線にかすかに爪形状の刻み目が観察される。89～91は半隆起線が横位にめぐり、90は下半は縄文である。92は平底で、幅広の二条の半隆起線で4分割され、さらに区画された部分を竹管による斜線で充填している。98は縄文を地文とし半隆起線によって区画されている。器厚が12mmとやや厚い。

3類（第14図99～112、図版7）

隆線文を特徴とするものをまとめた。

指頭等で押し引きしながら器面調整して隆線を作るもの（99・100）と貼り付け隆帯のもの（101～112）がある。

4類（第14図113～126、図版7）

その他の文様のものである。

113～115は沈線文である。116～120は屈曲した口縁部で、肥厚した口縁端部には連続する爪形状の刻み目があり、口辺部は竹管を短く押し引きして施文しており、下半は縄文である。121～123は竹管による押し引きによって施文されている。124は地文が縄文で細い粘土縫が貼り付けてある。125は貝の腹縁による条痕が見られる。126は底部で、沈線が巡り、胴部は縄文である。

5群（第16図127～138・第17図139～142、図版8）

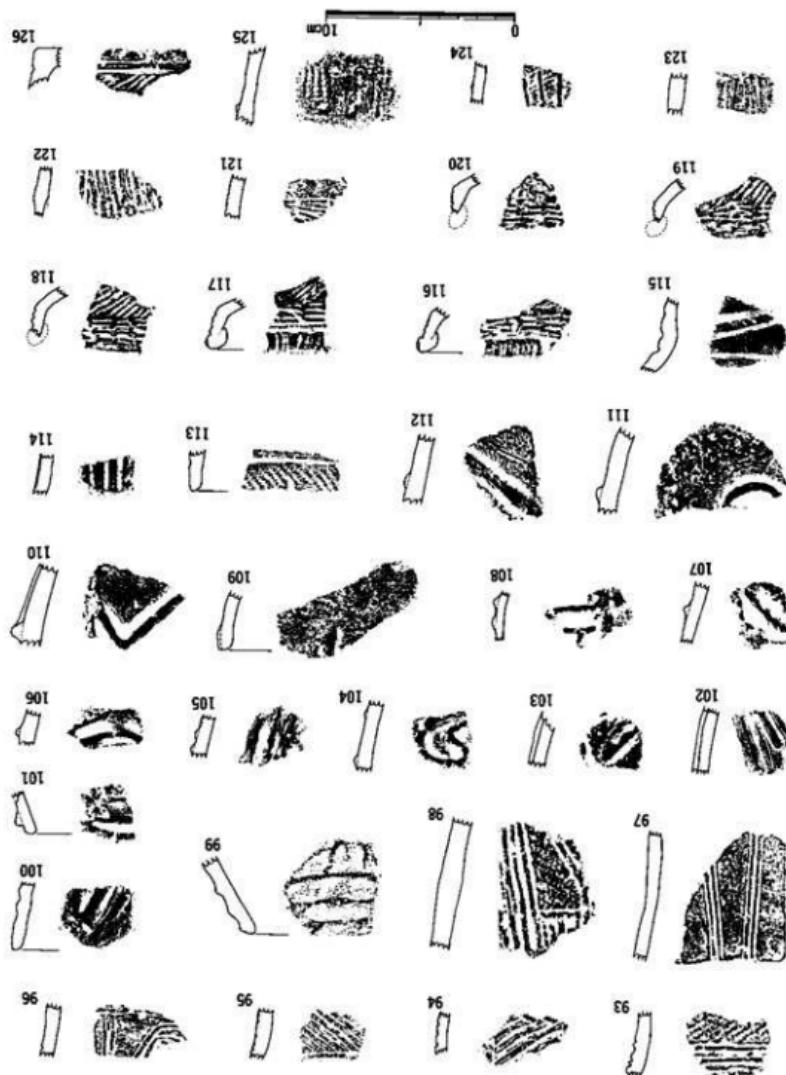
縄文および無文のものである。次の3類に分類する。

1類 木目状燃糸文のもの。



第13図 縄文土器 3群3類、4群1類・2類

第14图 铜文土器 4件2幅·3组·4面



2類 繩文のみのもの。

3類 無文のもの。

1類 (第15図127~134、図版8)

木目状撚糸文のものである。

127~132は沈線で区画された下年に木目状撚糸文が縦走する。器厚が10mmとやや厚い。新保式に比定できるようである。133・134は、胎土・焼成などから見て同一個体と推定される。口縁下に4本の沈線を巡らせ、その下に木目状撚糸文が見られるようである。

2類 (第15図135~138、図版8)

繩文のみのものである。

135は胴部がやや丸みを持ちながら比較的直立した円筒形の器形で、繩文とともに条痕調整が施してある。136は波状口縁で、137は口縁内面にも繩文が施されている。138は胴部が開き気味に立ち上がり、口縁部は直立する鉢形のものである。内面上半はミガキ調整である。

3類 (第16図139~142、図版8)

無文のものである。

141は屈曲した口縁部で、口縁内面に赤色顔料の塗彩が観察される。内面はミガキ調整されている。

6群 (第16図143~149、図版8)

底部および脚台部である。底部に関して、文様のあるものはすでに記述した。

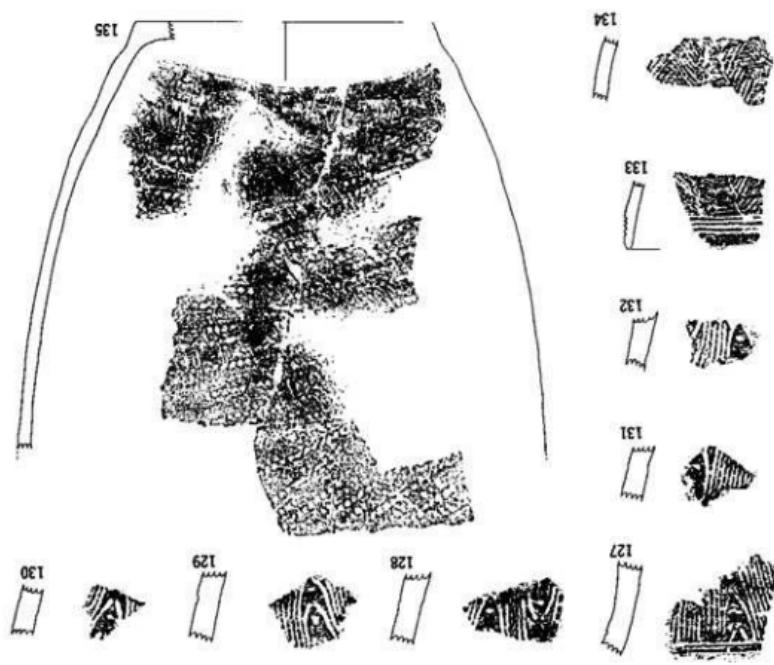
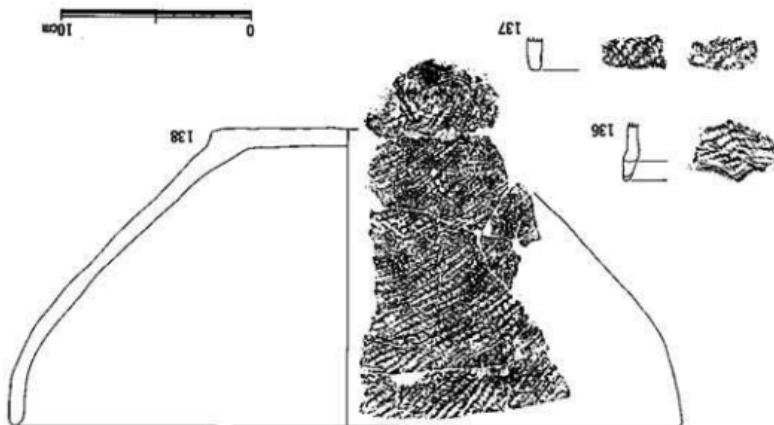
143は底部であるが、脚部がつくようであり、四つの透かし穴があるようである。

144~149は脚台部である。145~147は同一個体である。内外面が赤彩されている。方形の透かし穴がつくようであるが、痕跡のみのためはっきりした形は不明である。148は逆U字状の沈線文があり、円形の透かし穴がつくようである。149は繩文を地文とし、円形や三角形の透かし穴がつく。沈線で区画することにより、直線および曲線を組み合わせた形状を示している。

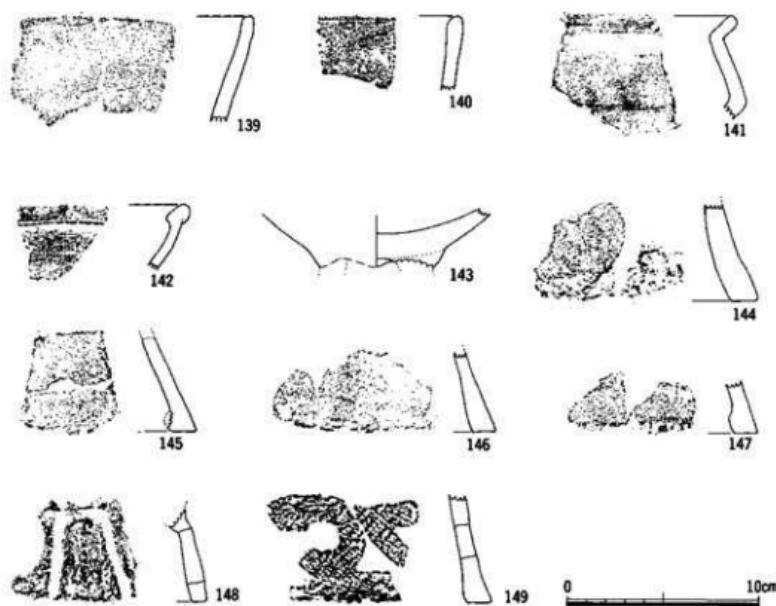
参考土器 (第17図、図版9)

今回の発掘調査地点からはずれているが、段丘の西端の畠から出土したものである。口径推定23.8cmの深鉢の口縁部で、環状の突起を持つ橋状把手がつく部分である。突起の上端は粘土紐を貼り付けて区画し、把手部から上下二方向に展開する文様帶は、連続する刻み目状の刺突が続いている。焼成は良好で堅致である。

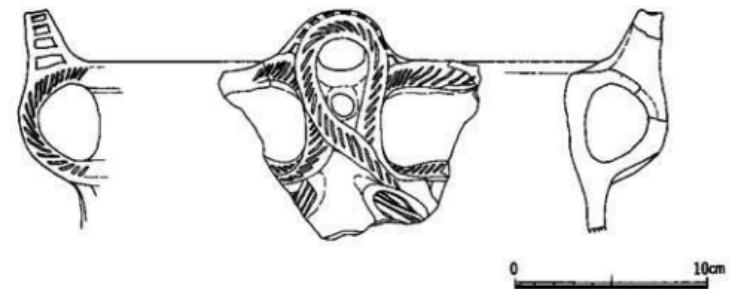
圖154 跡文土器 5號1組・2組



24 圖154 距文土器



第16図 繩文土器 5群3類、6群



第17図 繩文土器 参考土器

第2節 石器

石鏃5点、石匙2点、スクレイバー1点、打製石斧78点、磨製石斧1点、石錘14点、磨石・凹石30点、などが出土している。縄文土器と同様に、II・III層から出土しており、中央区南部および南区南部の出土量が多い。

石鏃（第18図1～5、図版10）

いわゆる下呂石製のものが5点ある。完形品は3点である。5はいわゆる平基鏃であり、基部が直線状をなすものである。1～4は基部に抉りの入るものである。3は火熱を受けている。

石匙（第18図7・8、図版10）

7は、いわゆる横形のものである。8は、いわゆる縦形のものである。石材はともにチャートである。

スクレイバー（第18図9、図版10）

下呂石製のサイドスクレイバーである。縦長の剥片を素材として、主要剥離面から急角度の調整を加えている。

打製石斧（第19図、図版11）

78点出土したが、完形品は15点である。打製石斧は、一般的に、短冊形・撥形・分銅形に分類されている。典型的な撥形・分銅形ではなく、すべて短冊形の範疇に入るとと思われる。重さは約100g～200gのものと、約300gを越えるものに二分できる。6は中央部両側に調整を加え、装着部を作り出しているようである。

磨製石斧（第20図13、図版11）

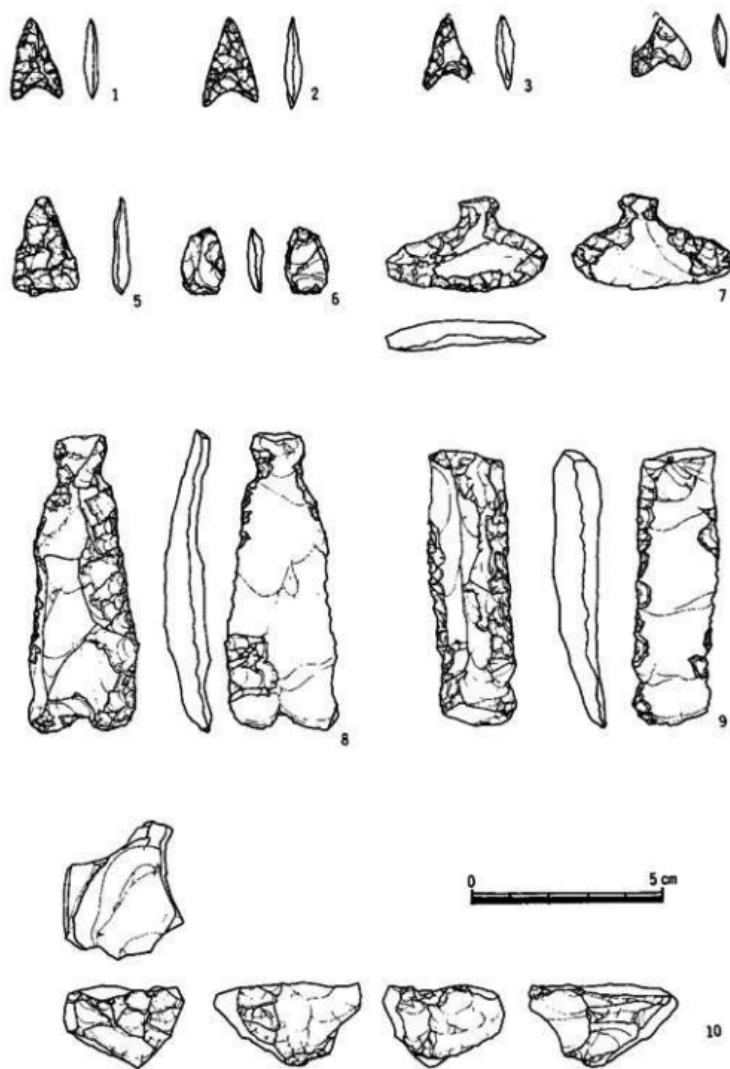
磨製石斧は破損品1点のみである。石材は安山岩である。両側縁に面取りを持つ定角式の石斧である。刃部は両刃である。

石錘（第20図1～12、図版11）

石錘は14点出土した。すべていわゆる礫石錘で、完形品は11点である。いずれも長軸両端部に剥離を入れ紐かかり部を作り出している。重さが29.3g～181.0gと大小各種のものがある。

磨石・凹石類（第21図1～9、図版12）

詳細な区分が困難があるので一括して取り扱う。完形品は28点。1～5は表面あるいは裏面に凹みがある。2・3・4は火熱を受けている。9はいわゆる特殊磨石と呼ばれるものであろう。



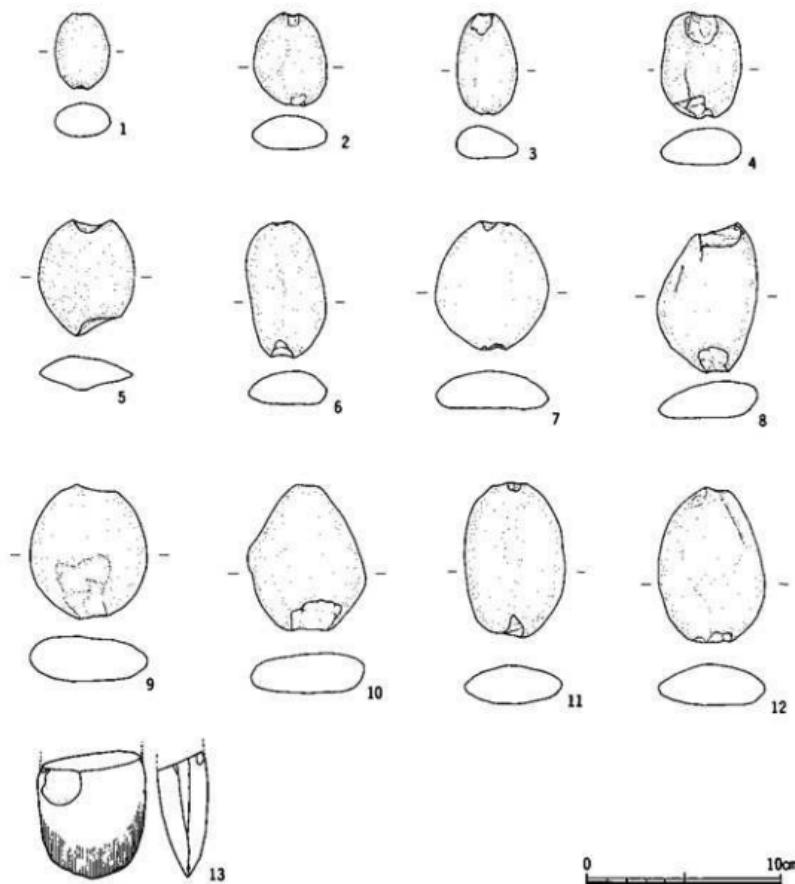
第18図 石器、石鏃、ピエス・エスキュー、石匙、スクレイパー、石核



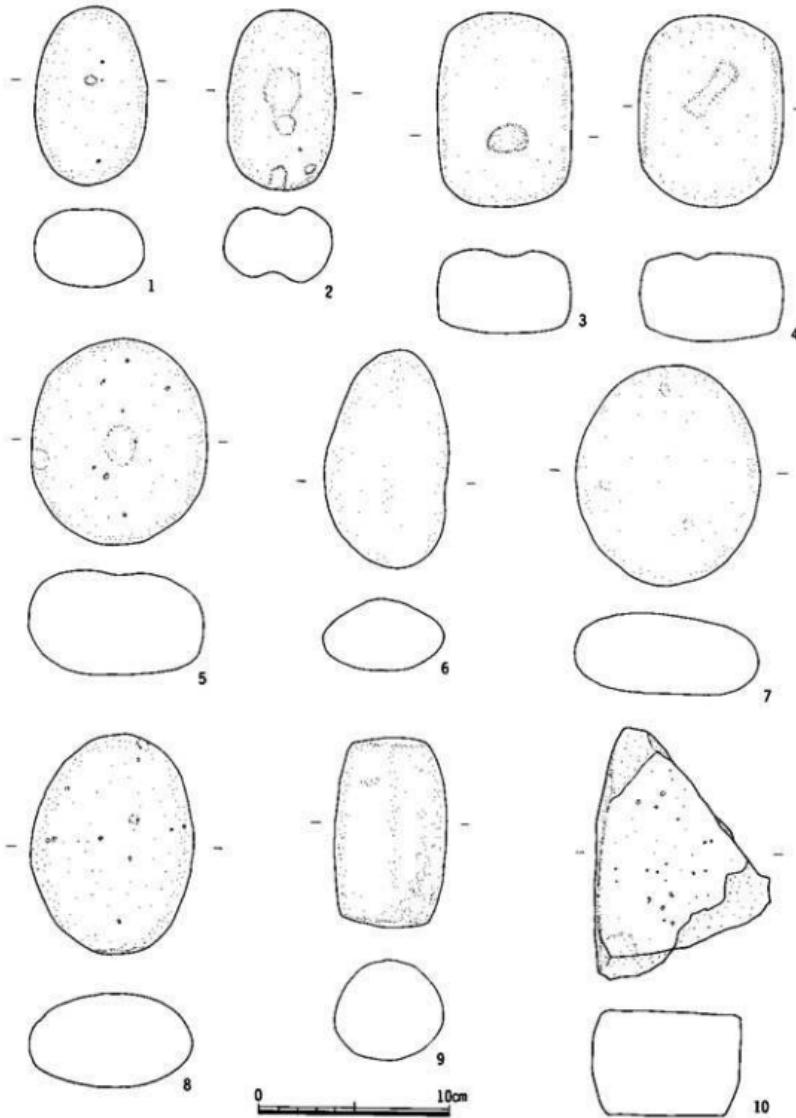
第19図 石器 打製石斧

石皿（第21図10、図版12）

破片であるが、偏平な石で磨耗しており、石皿と考えられる。火熱を受けている。



第20図 石器 石錐 磨製石斧



第21図 石器 磨石・凹石頭・石皿

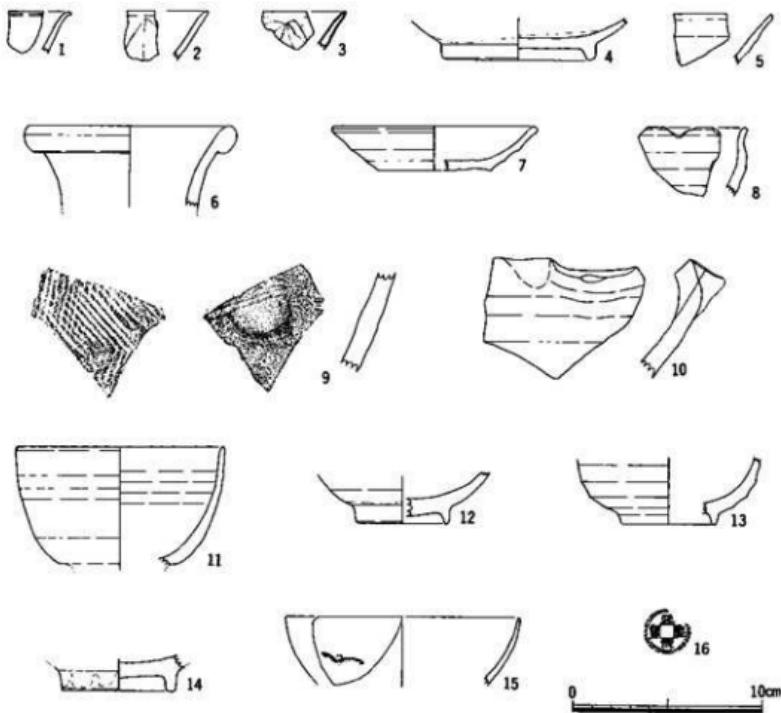
第3節 中近世の遺物（第22図1～16、図版12）

中近世の遺物として、中国製の青磁・白磁、灰釉陶器、山茶碗、古瀬戸、珠洲系陶器をはじめとする陶磁器類および古銭が出土した。図示したものの記述する。⁴⁾

- 1は白磁の碗の口縁部。外反し端部は丸くなっている。器厚は3mmである。
- 2・3は青磁。ともに碗の口縁部で錦蓮弁文である。2はくすんだ緑色を呈し、3は緑黄色を呈している。
- 4は灰釉陶器。皿の底部で、付高台はやや外湾し断面は台形を呈する。外面腰部にヘラ削り調整がみられる。胎土は緻密で色調は灰褐色である。内外面に灰釉が濁けがけしてある。
- 5は山茶碗（白瓷系陶器）。山茶碗は所謂「均質手」（北部系）と「荒肌手」（南部系）の2種類に大別される。5は碗の口縁部で前者のものである。やや外反し口縁端部は面とりしている。内面に自然釉がかかっている。
- 6は古瀬戸四耳壺の口縁部。玉縁状を呈し、釉調は淡緑色である。
- 7は鉄釉のいわゆる内はげ皿。口縁部径10.8cm、高さ2.4cm。底部中央部が釉はぎしてある。大窯IV期以降のものと思われる。
- 8は鉄釉の天目茶碗。口唇部はやや内傾し端部は再び外反する。大窯の末期のものと思われる。
- 9・10は珠洲系陶器。9は婬の胴部。外面に平行たたき目痕、内面に当て具痕が残っている。器厚は10mmである。10は片口鉢の口縁部。片口部を成形した際の指頭痕が残る。器厚は9mmである。
- 11はいわゆる尾呂茶碗。体部下半に丸みを持ち、口縁に向かって緩やかに立ち上がる。端部はやや反りぎみである。鉄釉にうのふ釉が流しかけてある。
- 12は丸碗の底部。削り出し高台で、内外面に灰釉が施されている。
- 13はいわゆる塗り分け碗。内面に灰釉、外面および高台底裏に鉄釉がかけてある。
- 14は鉄釉の大鉢の底部。削り出し高台で断面方形である。
- 15は肥前系磁器の染付碗。口縁部径は推定で12.4cm。
- 16は中国製銅錢の「天聖元宝」である。錢径2.5cm、孔径7mmで、篆書体文字である。初鑄年は北宋・天聖元年（1023年）である。

(註)

- 1) 島田修一氏のご教示による。
- 2) 小島俊彰氏のご教示による。
- 3) 同上
- 4) 陶磁器に関しては、内堀信雄氏のご教示を得て、古錢に関しては、今津利治氏のご教示を得た。



第22図 中近世の遺物

第5章 まとめ

今回の発掘調査地点は、遺跡の立地する段丘の東側に寄った場所であったため、当時の集落の中心地をはずれた所であったようである。しかし、今まで不明であった遺跡の時期や性格を知る上で貴重な資料を得ることができた。以下、わずかではあるが、発掘調査によって得られた知見を整理してまとめとしたい。

まず、出土遺物に関して注目されるのは、縄文中期初頭から前葉の土器がまとまって出土した点である。土器型式で言えば、鷹島式・船元I式などのいわゆる西日本系のもの、新保式・新崎式などのいわゆる北陸系のものが比較的多く、一部、関東の五領ヶ台式の影響を受けたものも見られる。縄文時代における文化交流を考える上で、西日本系と北陸系の土器の関連が注目される。飛騨地方の同時期の様相を見ると、やはり、北陸系土器の影響が強い時期ということができる。¹⁾

本遺跡および周辺の遺跡は、第1章で述べたように、時期や遺跡の性格が不明であった。しかし、少なくとも本遺跡は、中期初頭から前葉を中心とした時期を押さえることができた。本遺跡の上流約10kmの所に、大野郡久々野町堂之上遺跡がある。昭和48年から昭和54年にかけて行われた発掘調査によって、縄文前期中葉から中期末までの集落全体の様子が明らかにされている。²⁾堂之上遺跡において出土遺物が希薄な時期に、本遺跡の時期が相当することを関連付けるのは早計であろうか。

石器に関しては、調査地点の偏りの問題もあるが、打製石斧が比較的多いようである。また、下呂石製の石器類が高い割合を示すのは、飛騨地方の他の遺跡と同様である。

遺構に関しては、竪穴住居跡の検出が困難で、竪穴住居跡を想定させる二つのピット群を確認したのみであったのは残念であった。しかし、本遺跡の西側に広がる段丘面に集落があったことを予想される結果であった。段丘の西端の畠地で発見された土器からも、そのことを窺うことができる。

(註)

1) 小坂町教育委員会『南垣内遺跡Ⅰ』(1984)・国府町教育委員会『宮ノ下遺跡』(1988)・高山市教育委員会『鷹ノ巣遺跡A・B地点鷹ノ巣古墳発掘調査報告書』(1990)など。

2) 久々野町教育委員会『堂之上遺跡 第1~5次調査報告』(1978)『堂之上遺跡 第6・7次調査報告書』(1980)

石 器 一 覧 表

打製石斧

(単位はcm, g)

番号	出土区-番号	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	持因番号	備考
1	A 2 - 0 1	III	11.2	5.3	2.5	200.2	結晶片岩		完形
2	A 2 - 0 2	III	(8.8)	4.8	1.6	(77.2)	結晶片岩		一部欠損
3	B 3 - 0 2	III	(16.0)	6.4	2.8	(375.9)	安山岩		一部欠損
4	B 3 - 0 5	III	(7.0)	5.2	(1.4)	(50.9)	結晶片岩		欠損
5	A 4 - 0 3	III	(10.0)	6.7	(2.1)	(157.8)	結晶片岩		欠損
6	A 4 - 0 4	III	(5.9)	(7.6)	(1.9)	(101.5)	結晶片岩		欠損
7	A 4 - 0 8	III	(5.7)	(3.4)	1.2	(30.7)	結晶片岩		欠損
8	B 5 - 0 7	III	(6.1)	(4.7)	(2.0)	(61.1)	ホルンフェルス		欠損
9	A 6 - 0 2	III	(7.4)	5.0	2.6	(117.0)	結晶片岩		欠損
10	A 6 - 0 3	III	(8.8)	(5.7)	(1.7)	(132.8)	結晶片岩		欠損
11	A 6 - 0 4	III	(4.7)	(5.8)	(1.2)	(39.9)	結晶片岩		欠損
12	B 7 - 0 1	III	9.7	4.7	2.0	121.8	結晶片岩	19-4	完形
13	B 7 - 0 2	III	(12.5)	4.8	1.7	(132.1)	結晶片岩		一部欠損
14	C 8 - 0 4	III	4.7	4.8	1.9	102.3	結晶片岩		一部欠損
15	D 1 3 - 0 2	III	(7.2)	8.4	(2.6)	(196.8)	ホルンフェルス		欠損
16	E 2 0 - 0 1	III	(8.1)	5.6	1.2	(62.8)	結晶片岩		欠損
17	D 2 1 - 0 1	III	(9.3)	6.6	2.3	(174.3)	結晶片岩		欠損
18	C 2 2 - 0 1	III	(5.9)	5.1	1.5	(57.5)	結晶片岩		欠損
19	E 2 2 - 0 1	III	(7.3)	7.2	(1.3)	(82.6)	結晶片岩		欠損
20	D 2 5 - 0 1	III	13.6	8.2	2.9	350.6	結晶片岩		完形
21	D 2 5 - 0 2	III	9.6	4.7	2.2	116.9	結晶片岩		完形
22	F 2 6 - 0 7	II	(7.8)	4.8	(1.1)	(47.3)	ホルンフェルス		一部欠損
23	F 2 6 - 0 5	III	9.0	5.6	2.3	170.3	結晶片岩	19-1	完形
24	E 2 7 - 0 1	III	(10.3)	7.9	(2.9)	(321.1)	安山岩		欠損
25	F 2 7 - 0 5	III	(9.1)	(5.2)	2.4	(116.5)	結晶片岩		一部欠損
26	F 2 8 - 1 8	III	12.1	5.1	2.1	179.8	ホルンフェルス	19-7	完形
27	F 2 9 - 1 4	III	(10.0)	4.2	2.2	(117.4)	結晶片岩		一部欠損
28	F 2 9 - 1 5	III	(6.2)	4.5	1.4	(50.6)	結晶片岩		欠損
29	F 3 0 - 0 2	II	10.3	5.4	2.1	153.4	結晶片岩		完形
30	F 3 0 - 0 2	III	(6.9)	(5.5)	(2.2)	(101.6)	結晶片岩		欠損
31	H 3 2 - 0 1	I	(9.0)	6.0	1.4	(86.2)	結晶片岩		欠損
32	H 3 2 - 0 3	II	(10.0)	5.5	2.5	(154.3)	結晶片岩		一部欠損
33	C 3 5 - 1 0	II	(7.4)	5.7	1.6	(101.0)	安山岩		欠損
34	C 3 5 - 1 1	II	(12.6)	6.1	2.3	(215.2)	結晶片岩		一部欠損
35	E 3 5 - 0 8	I	(7.9)	5.4	1.4	(75.5)	結晶片岩		欠損
36	E 3 5 - 0 8	II	(5.5)	(4.7)	(1.6)	(53.4)	結晶片岩		欠損

番号	出土区-番号	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	標図番号	備考
37	B 3 6 - 0 6	II	(11.0)	5.6	1.7	(101.3)	結晶片岩		-部欠損
38	D 3 6 - 1 4	II	(8.4)	(4.8)	2.1	(109.5)	結晶片岩		欠損
39	D 3 6 - 1 5	II	(8.5)	4.9	2.0	(96.6)	結晶片岩		-部欠損
40	A 4 1 - 0 1	III	12.8	5.8	2.5	(234.7)	結晶片岩		-部欠損
41	E 4 2 - 0 1	III	(9.7)	6.2	2.9	(189.5)	結晶片岩		欠損
42	F 4 2 - 0 6	III	(7.3)	5.0	2.5	(110.4)	結晶片岩		欠損
43	D 4 3 - 1 2	III	(7.8)	7.5	(2.7)	(163.7)	結晶片岩		欠損
44	D 4 3 - 1 3	III	(7.6)	(8.2)	(2.0)	(134.9)	結晶片岩		欠損
45	D 4 3 - 1 4	III	(3.7)	(4.6)	(1.8)	(44.6)	結晶片岩		欠損
46	E 4 3 - 2 6	III	(8.3)	6.1	1.0	(79.8)	結晶片岩		欠損
47	E 4 3 - 5 3	III	13.5	6.1	2.8	(316.6)	結晶片岩		-部欠損
48	E 4 3 - 5 4	III	(12.7)	(7.8)	(2.7)	(355.1)	結晶片岩		欠損
49	E 4 3 - 5 5	III	(6.9)	5.2	1.7	(69.9)	結晶片岩		欠損
50	E 4 3 - 5 7	III	(10.4)	(6.9)	(4.0)	(338.8)	ホルンフェルス		欠損
51	F 4 3 - 0 1	III	(10.4)	8.3	(2.8)	(322.8)	結晶片岩		欠損
52	D 4 4 - 2 2	III	(5.5)	(5.2)	(2.1)	(79.6)	結晶片岩		欠損
53	D 4 4 - 2 7	III	16.6	6.1	2.4	339.6	結晶片岩	19-9	完形
54	E 4 4 - 7 1	III	9.3	5.1	1.6	85.2	結晶片岩		完形
55	E 4 4 - 7 4	III	(7.0)	4.5	1.6	(64.5)	結晶片岩		-部欠損
56	E 4 4 - 7 6	III	9.4	5.2	2.1	137.6	ホルンフェルス	19-3	完形
57	C 4 5 - 0 6	II	(15.6)	7.9	4.3	(686.0)	結晶片岩		-部欠損
58	D 4 5 - 4 2	III	(7.3)	5.3	1.6	(79.5)	結晶片岩		欠損
59	D 4 5 - 4 3	III	(9.5)	7.5	(1.7)	(116.5)	結晶片岩		欠損
60	D 4 5 - 4 4	III	(7.5)	4.9	1.2	(60.5)	結晶片岩		欠損
61	E 4 5 - 0 3	II	(7.8)	4.7	1.7	(70.1)	結晶片岩		欠損
62	E 4 5 - 0 7	II	(5.1)	3.9	1.2	(31.5)	結晶片岩		欠損
63	E 4 5 - 0 2	III	(9.1)	4.6	1.7	(78.4)	結晶片岩		-部欠損
64	E 4 5 - 0 3	III	12.9	5.3	2.3	189.9	安山岩	19-8	完形
65	E 4 5 - 8 9	III	10.6	4.7	1.9	129.6	結晶片岩	19-5	完形
66	E 4 5 - 9 0	III	9.3	4.4	2.1	105.9	結晶片岩		完形
67	E 4 5 - 9 1	III	(6.8)	3.9	1.2	(50.4)	結晶片岩		-部欠損
68	E 4 5 - 1 1 7	III	(6.3)	(4.1)	(1.1)	(32.0)	結晶片岩		欠損
69	E 4 5 - 1 5 1	III	(10.0)	5.3	1.5	(91.6)	結晶片岩	19-6	-部欠損
70	D 4 6 - 0 1	II	(4.5)	(5.0)	(1.4)	(41.6)	結晶片岩		欠損
71	D 4 6 - 0 2	II	(9.0)	4.9	1.4	(69.8)	結晶片岩		欠損
72	D 4 6 - 0 4	III	(13.4)	5.3	2.5	(203.0)	結晶片岩		-部欠損
73	E 4 6 - 0 1	II	12.4	4.1	1.7	108.9	結晶片岩		完形

番号	出土区一一番号	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	挿図番号	備考
74	E 47-08	III	(7.5)	5.5	(1.3)	(48.6)	結晶片岩		欠損
75	E 47-02	IV	(7.7)	5.0	1.9	(73.6)	結晶片岩		欠損
76	耕土 -29	?	(9.8)	4.6	2.1	(139.0)	結晶片岩	19-2	一部欠損
77	耕土 -33	?	(10.4)	(6.3)	2.4	(211.2)	結晶片岩		欠損
78	耕土 -50	?	9.0	4.8	1.6	91.2	結晶片岩		完形

磨製石斧

番号	出土区一一番号	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	挿図番号	備考
1	耕土 -30	?	(6.6)	(5.6)	(2.7)	(123.9)	安山岩	20-13	欠損

礫石錐(計測部位は、渡辺誠「礫石錐計測部位説明図」『阿曾田遺跡発掘調査報告書』(1985)参照)

番号	出土区一一番号	層位	a	b	L1	L2	W	S	重さ	石質	挿図番号	備考
1	E 27-03	III	0.7	0.6	5.3	5.2	3.1	1.7	39.6	流紋岩	20-3	完形
2	D 28-01	II	1.5	—	—	—	5.5	2.1	(113.9)	流紋岩		欠損
3	E 29-12	III	0.8	0.8	3.9	3.8	2.9	1.8	29.3	流紋岩	20-1	完形
4	B 36-05	II	0.8	1.2	7.1	6.9	4.1	1.7	76.5	結晶片岩	20-6	完形
5	E 39-01	II	1.0	—	—	—	—	—	(30.2)	安山岩		欠損 被火熱
6	E 43-24	III	1.2	0.9	5.6	5.2	4.2	1.9	62.1	安山岩	20-4	完形 被火熱
7	F 43-53	III	1.2	1.3	8.2	7.9	5.6	2.2	(142.4)	流紋岩	20-12	欠損
8	E 44-40	III	1.1	1.8	7.7	7.5	6.2	2.1	123.7	結晶片岩	20-10	完形 被火熱
9	E 44-41	III	2.3	2.0	6.1	4.5	5.0	1.8	58.1	結晶片岩	20-5	完形 被火熱
10	E 44-72	III	1.5	1.3	6.7	6.5	5.9	2.4	121.8	安山岩	20-7	完形
11	F 44-05	III	2.0	1.5	7.1	6.5	6.2	2.4	156.4	結晶片岩	20-9	完形
12	E 45-88	III	1.8	0.9	8.2	6.5	5.3	2.0	181.0	流紋岩	20-11	完形
13	E 45-126	III	2.0	1.2	7.9	7.2	5.3	1.9	80.7	結晶片岩	20-8	完形
14	耕土 -11	?	0.9	0.8	4.8	4.6	3.8	1.8	45.3	流紋岩	20-2	完形

石鎚

番号	出土区一一番号	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	挿図番号	備考
1	P 74-02	III	(1.5)	1.6	0.4	(0.5)	安山岩	18-4	下呂石
2	E 29-13	III	2.4	1.4	0.4	0.8	安山岩	18-2	下呂石
3	E 45-83	III	2.6	1.7	0.5	1.8	安山岩	18-5	下呂石
4	E 45-113	III	(1.9)	(1.3)	0.4	(0.7)	安山岩	18-3	下呂石 被火熱
5	耕土 -15	?	2.2	1.4	0.4	0.8	安山岩	18-1	下呂石

石匙

番号	出土区一一番号	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	挿図番号	備考
1	E 26-05	III	2.5	4.2	0.8	5.7	チャート	18-7	下呂石 横形
2	E 44-46	III	7.9	2.9	1.2	20.7	チャート	18-8	縦形

磨石・凹石

番号	出土区一一番号	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	擇因番号	備考
1	A 4 -0 6	III	11.5	7.6	4.4	570.8	流紋岩		完形
2	D 1 1-0 1	III	9.0	7.9	5.7	527.1	結晶片岩		完形
3	D 1 3-0 3	III	9.9	8.2	4.8	514.4	結晶片岩		完形
4	E 2 0-0 2	III	9.2	8.5	6.0	661.0	砂岩?		完形 凹側2
5	E 2 2-0 2	III	8.7	7.6	5.6	450.2	安山岩		完形
6	E 2 4-0 1	III	11.6	9.6	4.2	682.0	結晶片岩	2 1-7	完形
7	C 2 6-0 1	III	8.7	5.3	5.0	333.3	安山岩		完形 凹表1
9	E 2 9-0 2	III	9.5	5.8	3.9	257.0	結晶片岩	2 1-2	完形 凹表2・裏3 被火熱
10	F 3 0-0 4	III	10.8	9.3	5.5	809.0	結晶片岩	2 1-5	完形 凹表1・裏2
11	B 3 2-0 1	III	10.0	5.9	5.6	556.1	流紋岩	2 1-9	完形 特殊磨石
12	F 3 4-3 2	II	10.3	7.4	6.4	(606.0)	安山岩		一部欠損
13	F 3 4-3 3	II	11.5	8.6	5.0	724.0	安山岩	2 1-8	完形
14	D 3 6-1 6	II	10.0	8.7	5.7	595.6	結晶片岩		完形
15	F 4 2-0 1	III	11.4	6.6	3.7	387.5	流紋岩	2 1-6	完形 被火熱
16	F 4 2-0 3	III	12.3	7.1	3.1	365.9	安山岩		完形
17	D 4 3-1 5	III	9.8	5.9	6.1	517.3	安山岩		完形 凹裏1 被火熱
18	E 4 3-2 5	III	9.4	6.0	4.1	336.4	結晶片岩	2 1-1	完形
19	F 4 3-5 2	III	6.9	6.1	3.9	211.2	結晶片岩		完形
20	D 4 4-3 7	III	11.6	10.4	7.3	1301.0	結晶片岩		完形
21	D 4 4-3 8	III	7.0	6.5	5.2	311.5	結晶片岩		完形
22	D 4 4-3 9	III	6.5	4.3	3.7	128.6	結晶片岩		完形
23	D 4 4-4 0	III	9.0	5.4	5.3	385.6	結晶片岩		完形 凹裏1
24	E 4 4-4 3	III	10.2	7.6	4.7	585.9	結晶片岩	2 1-4	完形 凹裏1 被火熱
25	E 4 4-4 4	III	10.2	7.1	4.4	502.9	結晶片岩	2 1-3	完形 凹裏1 被火熱
26	E 4 4-4 5	III	9.5	8.0	5.3	596.4	結晶片岩		完形 凹裏2
27	E 4 4-7 8	III	(10.0)	9.2	5.4	(672.0)	安山岩		欠損
28	F 4 4-0 4	III	11.1	9.7	6.0	926.0	結晶片岩		完形 凹表1・裏2
29	D 4 5-4 0	III	8.7	7.8	6.0	508.1	結晶片岩		完形 凹側3
30	E 4 6-0 4	III	9.2	8.2	4.6	460.4	安山岩		完形

スクレイバー

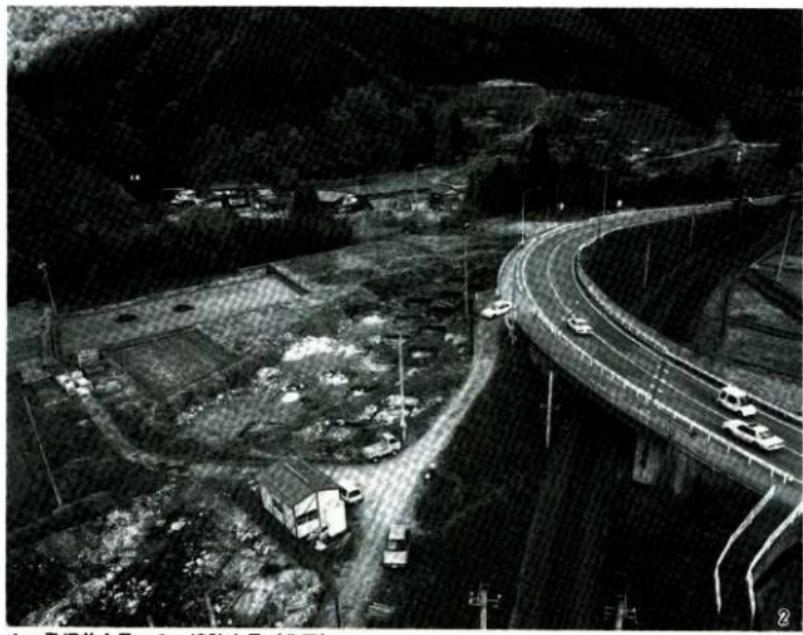
番号	出土区一一番号	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	擇因番号	備考
1	E 4 4-4 7	III	7.3	2.3	1.3	19.1	安山岩	1 8-9	下昌石

ピエス・エスキーエ

番号	出土区一一番号	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	擇因番号	備考
1	P 7 6-0 4	III	1.8	1.1	0.4	0.7	黒曜石	1 8-6	

図版
1

1



2

1. 発掘前全景 2. 遺跡全景（北区）

圖版
2

1

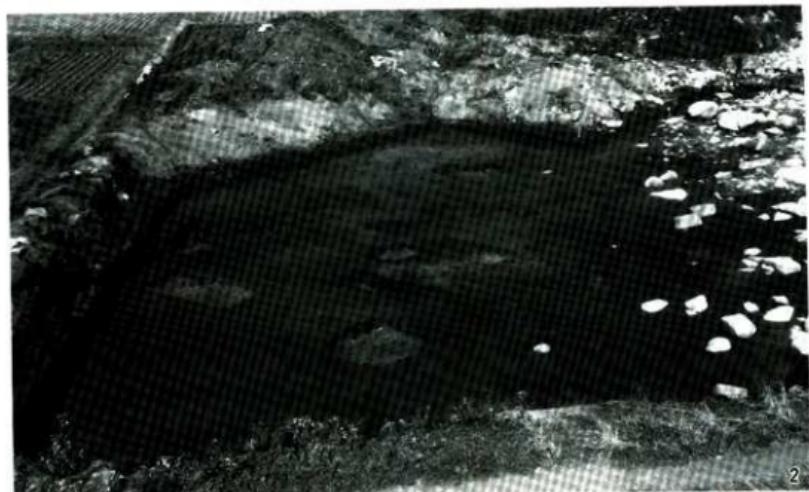


2

1. 遺跡全景（中央区・南区） 2. 作業風景

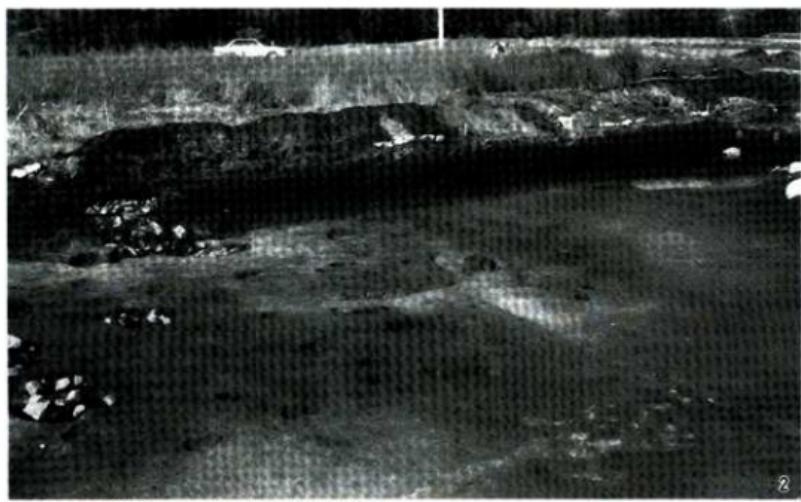


1

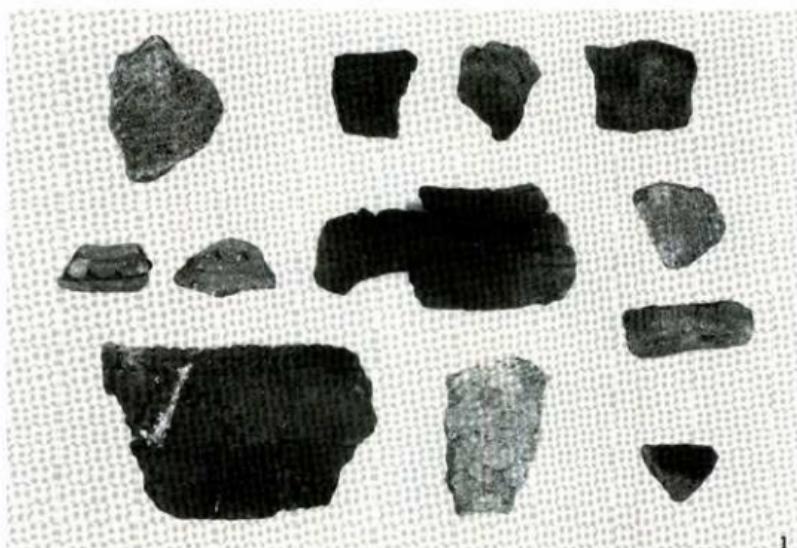


2

1. 中央区南部全景 2. ピット群（中央区南部）

図版
4

1. 南区南部全景 2. ピット群（南区南部）

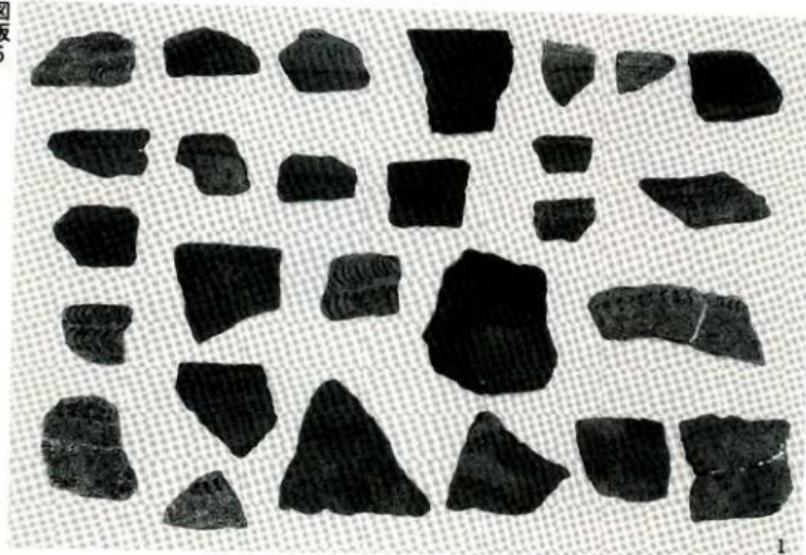
図版
5

1



2

1. 縄文土器（ピット出土の縄文土器） 2. 縄文土器（1群、2群1類）

図版
6

1

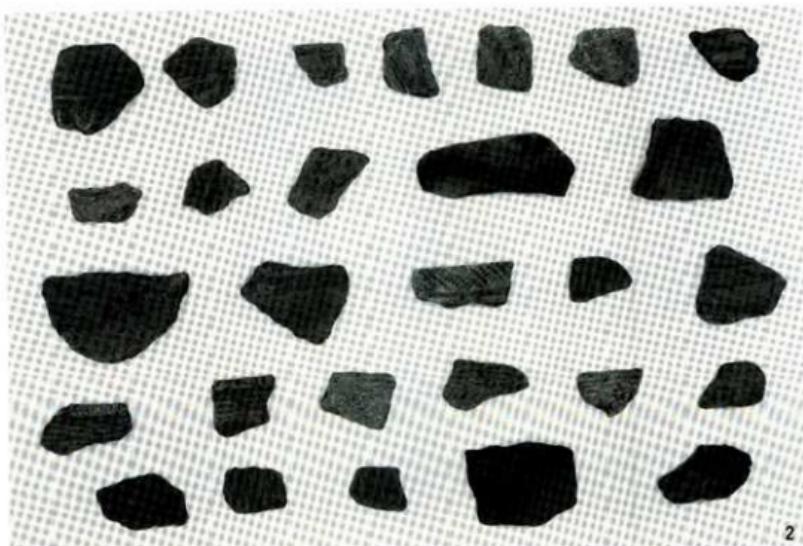


2

1. 繩文土器（2群2類・3類） 2.（3群1類・2類・3類）

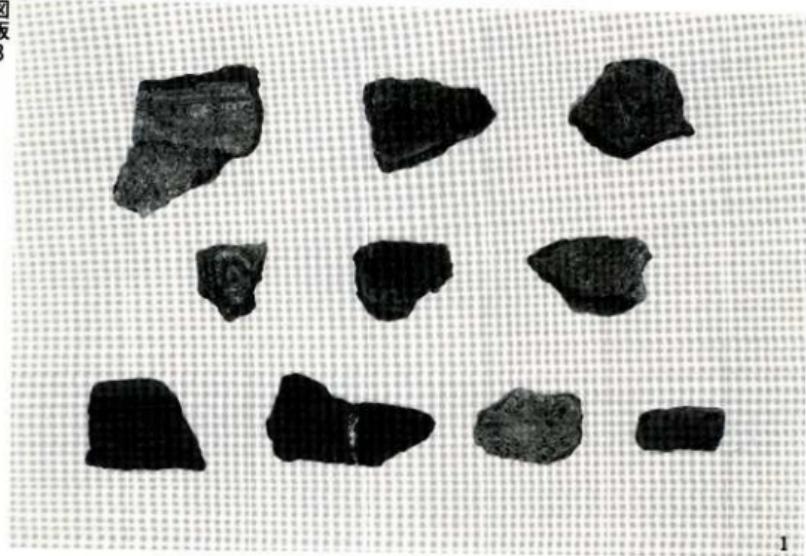
圖版
7

1

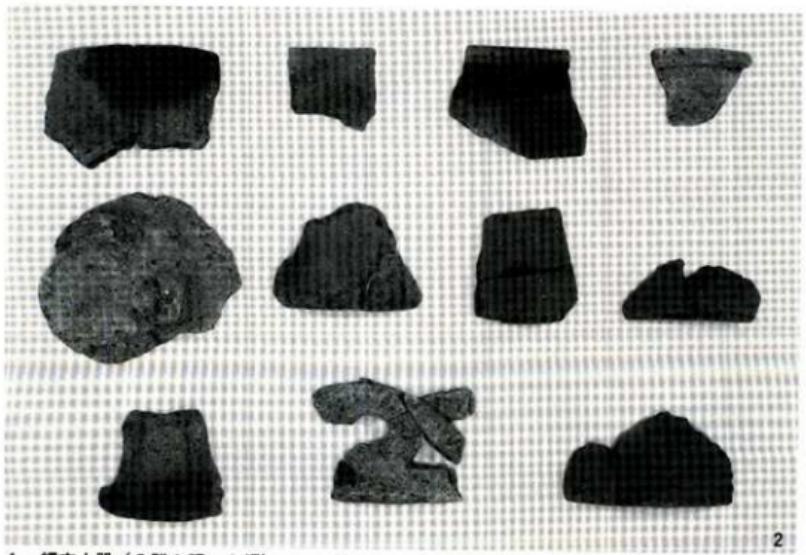


2

1. 縄文土器（4群1類・2類） 2. 縄文土器（4群3類・4類）

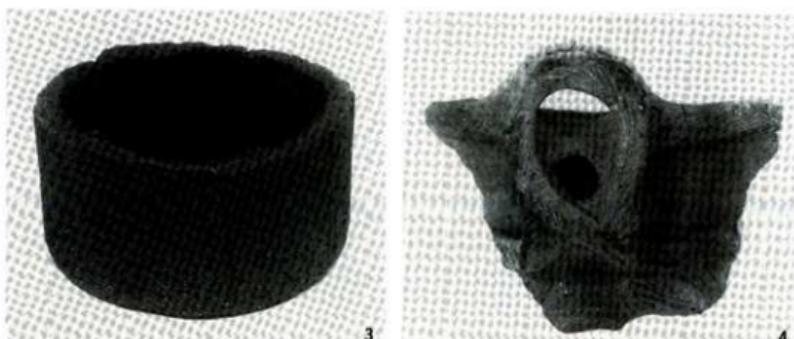
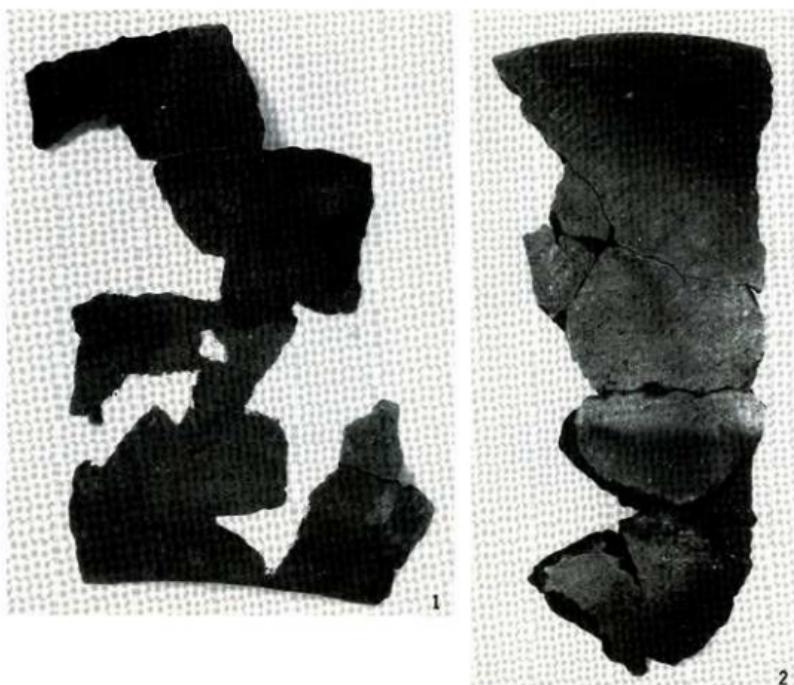
圖版
8

1

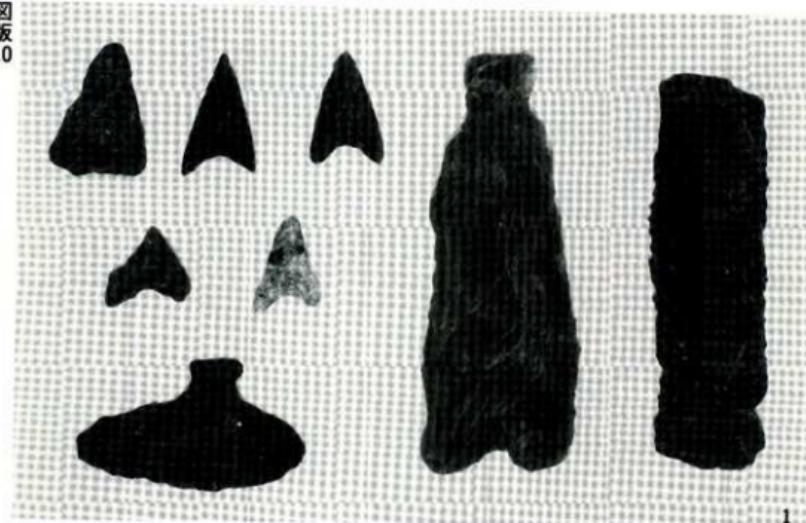


2

1. 縄文土器（5群1類・2類） 2. 縄文土器（5群3類，6群）



1・2. 繩文土器（5群2類） 3. 繩文土器（4群2類） 4. 繩文土器（参考土器）

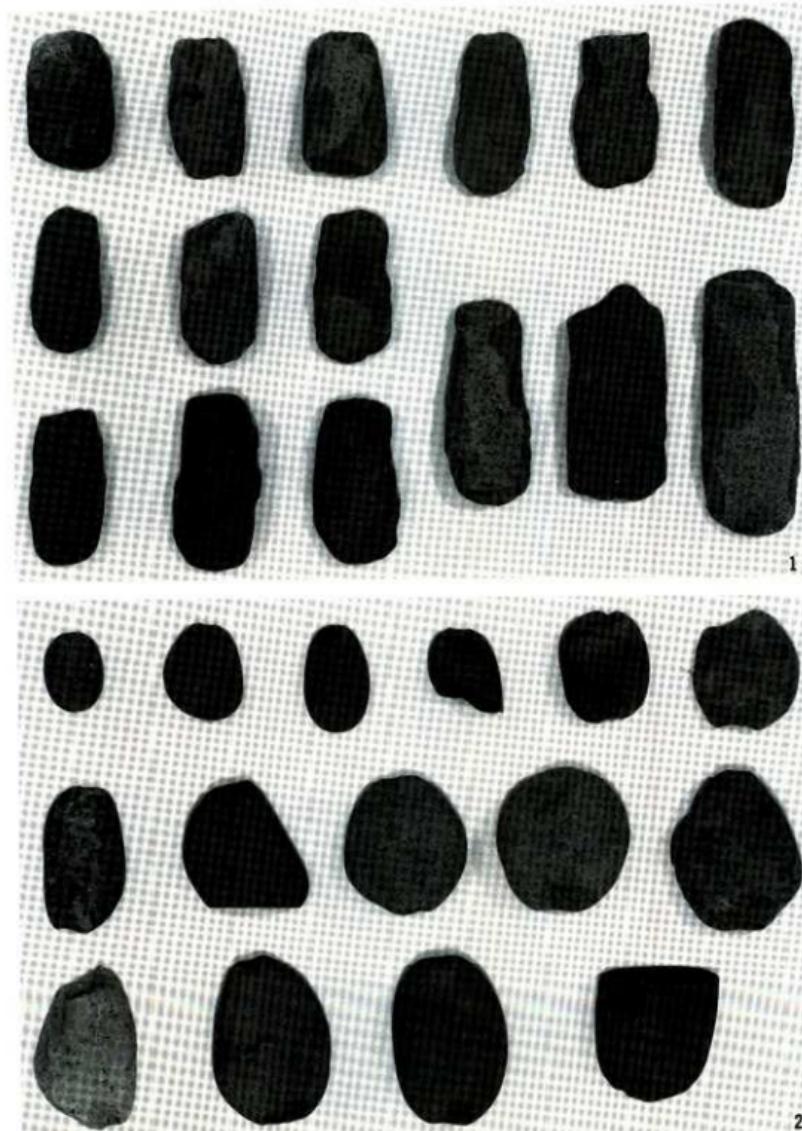
図版
10

1



2

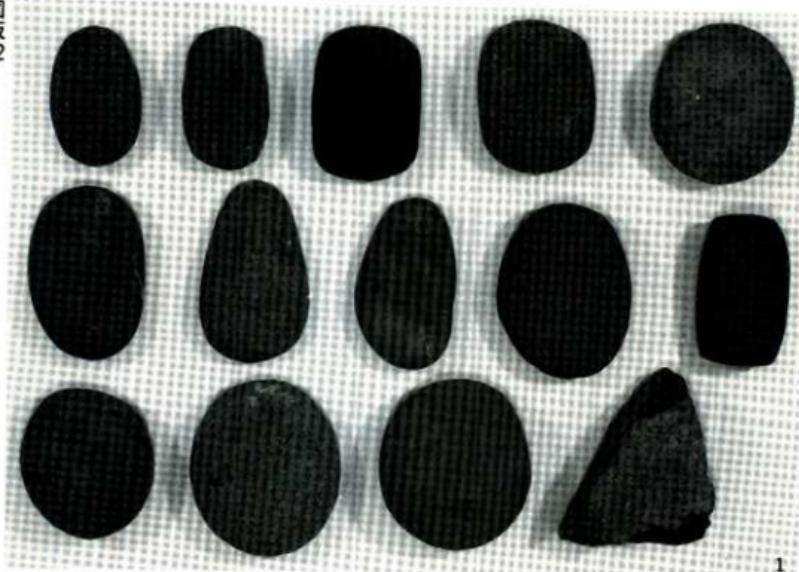
1. 石器（石錐、石匙、スクレイパー） 2. 剥片など

圖版
11

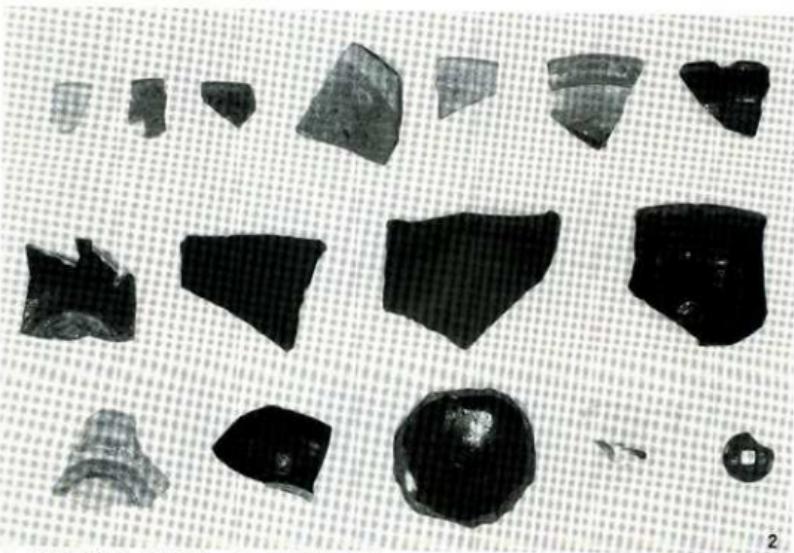
1. 石器（打製石斧）

2. 石器（石錘，磨製石斧）

2

図版
12

1



2

1. 石器（磨石・凹石類） 2. 中近世の遺物

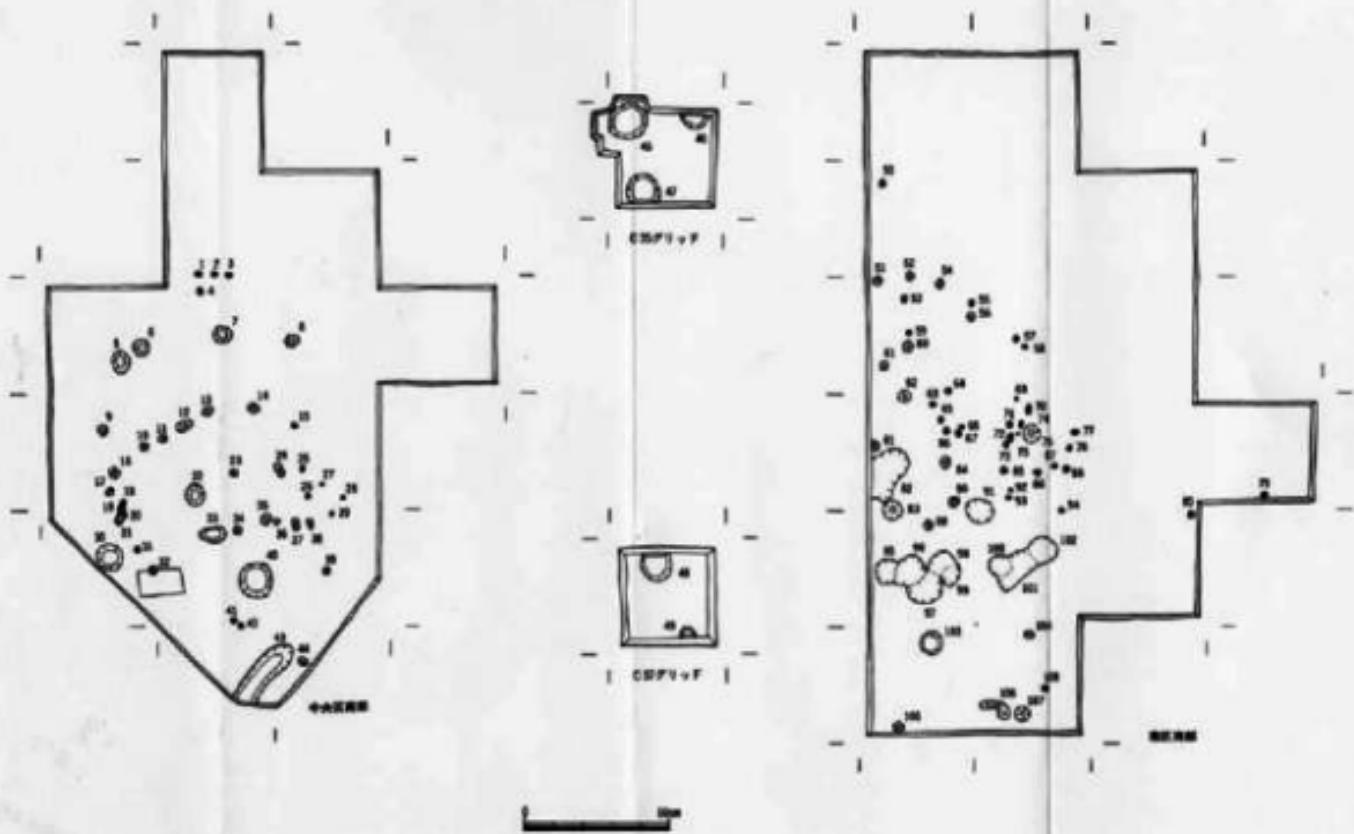


図38 細胞形（電子ビーム写真）

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第2集

門坂シズマ遺跡

1992年3月25日 印刷

1992年3月31日 刊行

編集・発行

岐阜県本巣郡聴積町牛牧宮下 395

財団法人 岐阜県文化財保護センター

印 刷

西濃印刷株式会社